
可愛い花にも棘はある

加倉千早

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可愛い花にも棘はある

【Nコード】

N9836H

【作者名】

加倉千早

【あらすじ】

「伯爵」の依頼で闇の仕事を請け負う彩王ミコトは、かつて暁矛王国の第二王子だった。今度の標的は、侯爵家の若き当主ランシール・デュミール。百戦錬磨の勇将を暗殺するべく、ミコトはデュミール家に潜入を試みるのだが……。

徹頭徹尾、女装。そういう世界ですから、気になさらずに。

【作品番号18】

視線

ほら、やっぱりボクの帰りを待っててくれた。待ち侘びた、なんて顔は絶対に見せてくれないけど。

「お帰り、ミコト。お使い御苦労だったね」

いつもの椅子に深々と腰掛けたまま、彼は優しい笑顔でボクを迎えてくれた。ここはボクの家だけど、その椅子は彼しか座らない。彼のための椅子なんだ。

「ただいま、伯爵」

変な呼び方だと思うでしょ。でもこれは、いわゆる渾名ってヤツなんだ。実際どういう地位かは知らないし、本名も教えてくれないから、そう呼ぶことにした。雰囲気伯爵って感じがしたからね。別に深い意味はない。

「首尾は？」

「完璧！」

「では約束のお駄賃を上げよう。これでお菓子でも買いなさい」

伯爵は「お駄賃」なんて言うけれど、実はこれが報酬の後金だったりする。つまり伯爵は仕事の依頼主なんだ。でも伯爵は万事この調子で、いつもボクを子供扱いだ。

そんなに頼りなく見えるのかなー？

でも仕方ないか。ボク、力持ちじゃないし。背も、そんなに高くないし。同じ十七歳と比べると、やっぱり見劣りがするかも。特に、異民族の人たちと比べるとね。

ちなみにボクは、伯爵に雇われている暗殺者で、名を彩王ミミコト^{サイオウ}。名前からも分かる通り、誇り高き堯矛の民^{ギョーム}だ。しかも、王位継承権第二位の、れっきとした王子様だったんだ！ もう昔の話だけど。

尤も、堯矛はリュノック連合王国の中では最小の国だから、王の格付けは、大国の地方領主とそんなに変わらない。ただ、他とは少し違う文化を誇っていて、西方の遠国^{おんしゆく}なんかでは『伝説の都』なんて呼び方をされているらしい。ま、伝説になっってしまうほど、ミヤビな国だったんだ。

「ミコト、今日も可愛いね」

会えば必ず、伯爵はボクのことを可愛いつて言ってくれる。それを素直に喜ぶべきか、判断が難しいところだけど、褒められればボクだって嬉しい。

王宮に住んでいた頃は、みんなお世辞や社交辞令ばかりだったからね。はつきり言つと、つまんなかった。

でも、内乱が起こつて陛下^{ちちしえ}が殺されてしまわなければ、今も大勢の人たちに傳^{かす}かれて、気儘で優雅な生活を送っているはずだったんだ。

堯矛は外敵から身を守る術すら持たない弱小国だったけど、大陸王、即ち連合王国を統べるリュノック王との条約で、ちゃんと守ら

れていたから、とても平和な国だったんだ。それなのに内乱だなんて、今でも信じられないよ。当ても色々な噂が飛び交ったけど、真実は誰も知らない。

まだ元服していなかったボクは、母上の手で国外へ逃されたのだけど、その母上も病に倒れて、ついに遠いところへと逝ってしまった。きつと、長旅に耐えられるような身体ではなかったんだね。至れり尽くせりの王宮で、何年も過ごしていたら、そりゃあ体力もなくなるってもんでしよう。ボクは剣の稽古もしていたし、母上よりは体力があつたと思うけど、それでも旅はきつかったから。

そうして母上と死に別れ、ひとりぼっちになったボクは、途方に暮れる日々を過ごしていた。身に着けていた宝石類を二束三文で売り払い、どうにか作ったお金も、あっさりと使い果たし、いよいよ宿から追い出されそうになったとき、優しい声を掛けてくれた人がいた。と言っても、それは伯爵じゃないよ。彼の登場は、もう少し先の話だ。

宿代を支払ってくれるばかりか、ボクにでも出来るような簡単な仕事を世話してくれるなんて、なんて親切な人なの！　と思っただね、ボクは。

でも騙されていたんだ。確かに宿代は支払ってくれたけど、ボクにでも出来る簡単な仕事というのは、花街で見世物として檻に入ることだったんだ。勿論、そんなことボクが承知するはずがない。だけど逆らうには手遅れだった。つい署名してしまった、小難しい契約書を楯に取られ、ボクは彼らの所有物となってしまうんだ。

しかも逆らえば鞭が飛んでくるし、態度が悪いと食事も抜かれてしまう。いったん檻に放り込まれたら、ボクの意味では出られない

し、いつも側には怖そうな人がいて、とても逃げ出せるような状況ではなかった。

芸も出来ない子供を檻に閉じこめて、いったい何が楽しいの、って思うでしょ。これが実は楽しいらしい。堯矛の民というだけで闇の業者は大喜びだとか。

堯矛は別名『妖精の都』と言われるくらい、美男美女が多い国なのだそう。しかも王家の洗練された血脈の所為で、特にボクの場合が肌が透き通るように白くて、その『白鷺館』しろさぎかんの女将にも「妖精のようだ」って言われちゃって大評判。いや別に、喜んでるわけじゃなく。

恥ずかしいほど露出の多い、変な衣装を着せられて、行き交う人の視線に晒されていなければならなかったんだ。無理に微笑まなくても、助けを求めるような表情が、逆に男心をくすぐるんだって。

あのねえ、ボクは本当に助けを求めていたの！

でも変なこと喋ると鞭で打たれるから、ずっと我慢していたのに。

中には変な男もいて、檻の中のボクに触ろうとしたりとか、髪を引っ張ったりとか、色んな目に遭わされたね。酔っ払いにお酒を浴びせられたときは、ほんと泣きそうになったもん。

そんな我慢の日々も、伯爵との出会いによって、ようやく終わりを告げることとなった。

「おまえ、芸は出来るか？」

夕陽を背にして佇む伯爵を見たとき、ボクは「この人だ」って思った。だって、いつも願っていたから。素敵な騎士が現れて、「殿下、お迎えに上がりました」って言うてくれるのを待っていたから。

伯爵の風貌は、ボクが思う素敵な騎士そのものだった。

すらりと背が高く、歩けば優雅、止まれば典雅で、たとえ泥の中に立っていても光を失わないような人。例えば亡くなった兄上のような人こそ、ボクの理想の騎士と言えた。

人が聞いたら笑い出しそんな理想を、伯爵は総て兼ね備えていたんだ。頭もいいし、顔もいい。おまけに金持ちなんだから、完璧だよね！

「芸は出来ないけど、小太刀なら少し」

「剣術か、そいつはいい。私に、見せてくれるか？」

売り込みは大成功。すかさず「うん」と答え、ボクは檻を出た。

伯爵はボクを身請けしてくれたばかりか、人並みの家までも買いつけてくれた。てつきり下心もあると思っただのに、そんな素振りも見せなかった。彼はボクに、自由という空を与えてくれたんだ。

「いつか、ミコトの力が必要になる日が訪れるだろう。そのときには私に力添えをして欲しい」

それからのボクは、剣術の鍛練に励み、来る日のために様々なことを学んだ。伯爵の期待に添えるように。

伯爵が欲しがっていたのは、王宮や貴族の邸にさえ誰にも怪しまれることなく潜り込めるような、特殊な人材だった。

実際、王宮での諜報活動ならボクほど向いている人間はいないと思う。今でこそ庶民の生活にも慣れてきたけど、王宮で育ったボクには優雅な物腰という武器がある。そして何より、ボクには幼少から叩き込まれた武芸の技　　桜華流小太刀おうかりゅうがある！

「伯爵。いつまで見てるのー？」

ボクが着替えていると、伯爵の視線を感じるんだ。

優雅に足なんか組んじゃって、物憂げにボクの背中を眺めているという感じ。青みがかかった灰色の瞳は如何にも気怠げで、いつも何かを待っているような、神秘的な雰囲気を漂わせている。淡い色彩の髪も魅力的。堯矛にはない色だからね。

「ミコトは首筋が綺麗だから、髪は結わいておかないと、よく見えないよ」

「首筋だけ？」

人のハダカ見といて、ふつう首筋だけ褒めるかなー？

「勿論、足の裏も綺麗だけど、なかなか見られなくて」

「あっそ」

要するに見えないところが好きなのね。

つくづく思うけど、伯爵って変な人。もう長い付き合いになるけど、未だに考えてることが分からない。ボクのこと、さんざん可愛いとか言っておきながら、そのくせ冷めた瞳でボクを見る。仕事の依頼で家に来て、用件だけ済ませると帰っちゃうし。たまには泊まっていくとか、ふたりで何処かに遊びに行くとか、そういうお駄賃があってもいいと思わない？

でも、いいんだ。ちゃんと仕事をしていれば、伯爵は優しくしてくれるし、報酬は破格だし。

標的は貴族や騎士ばかりで危険も大きいけど、それ以上に見返りも大きいから、ボクは今の仕事を続けてる。

いつの日か堯矛を再興できたら。そんな儂い夢を見て。

現実的には、お金を貯めて爵位を買うというのが当面の目標だ。いわゆる成金男爵ね、言葉は悪いけど。

待っていてください、お姉様。いつか必ず、ミコトがお迎えに上がります！

豎琴

お気に入りは赤い振袖。目の覚めるような鮮紅の空を、黄色の蝶が乱れ飛ぶという派手な凶柄だ。

ユヒラお姉様は逆に黄色を基調とした着物を好んだけど、ああいう色が似合うのは、素材がいいからだよね。所詮ボクみたいなお子様は、派手さで勝負するしかないんだ。と思っていたら、いつの間にかボクも十七歳。ちよつとは成長したのかなー？

ちなみに、ユヒラお姉様というのは、母を同じくする姉で、『堯^{イム}矛の宝珠』と称されるほどの美人だ。傾国どころの騒ぎじゃない。実際に、彼女を巡る争いから内乱が起こったと噂されるほどなんだ。ほんとか嘘か知らないけどね。

そのユヒラお姉様は今、腹黒いと評判のデイヴェラージエ伯に囚われている。表向きは客人かも知れないけど、ボクに言わせれば籠の鳥も同然だ。だって、お姉様は望まないはずだもん、そんな人と一緒にいるなんて。

それでも、ユヒラお姉様が生きていてくれたことは、何もかも失ってしまったボクには救いとなった。

ユヒラお姉様という光が、今のボクを照らしている。そんな気がした。

話を戻そう。お気に入りの赤い振袖ね。これが便利なんだ、色々。帯の結び目に懐剣を隠せるし、他にも色んな場所に小柄^{こづか}を忍ばせることが出来る。匂い袋の中身は、実は毒薬を入れた小瓶だった

りするんだ。しかも、ちゃんと淑やかに見えるから、凄い。

でも本当に凄いのは、ボク。あらゆる武器を使いこなせるし、淑やかにも振る舞える。こんな凄いボクも、伯爵から仕事の依頼がないときは、普通に街で働いてるんだ。世を忍ぶ飯の姿ってヤツだね。

小さな居酒屋で、お客さんの相手をするのがボクの仕事だ。こっちの都合で不規則になってしまっから日雇いだけど、給金は悪くない。給仕をするだけの至って簡単な仕事なのに、石切りの重労働よりも日給が高い！

居酒屋サリクララの主人曰く、「ミコト目当ての客が多いから、こっちの方が儲けさせてもらってる」ということらしい。

喜ぶべきだね。王宮では常に、優秀な兄の陰に隠れて目立たなかったボクが、ここでは持て囃はやされている。

周りを見渡せば、優雅とは縁のない酒飲みの男ばかりだけど、居心地は悪くない。客同士の下品な会話も、慣れてしまえば笑って聞き過くせる。

「ミコトちゃん、こっちも頼むよ」

「はい、ただいま」

笑顔を振りまくだけなら、無料タダ。夜のお相手はいたしません。

尤も、こんなところに安酒を飲みに来てる人間に、ボクを買えるほどの金持ちはいないけど。何しろボクは高いから。

以前、店内で乱暴を働いた客を叩きのめしちゃったことがあって、常連客はボクが強いを知ってるんだ。往来でも何度か大立ち回りをやってるし、一部には「ミコトは怖い」という噂が立っているらしい。

だから、この店の客はボクを怒らせるような真似は絶対にしない。常連ほど、ボクの我慢の限界を心得ていて、無礼を働いても精々お尻を触ってくる程度。

ふと疑問。人のお尻なんか触って、楽しい？ この辺りがまだ庶民の感覚に付いていけないんだ。

「はい、青菜に焼き椎茸、お待ち！」

「あ、青菜こつち」

「はい」

少しでも手が空けば、お酌もして上げられるのだけど、それが殆ど流れ作業。テーブルとテーブルの間を擦り抜けながら、次々と別の客を相手しなければならぬ。みんな平等に相手をして上げないと、たまに怒る人がいるから。

「ミコト、あれを頼む」

「おお、そつだ。やってくれ！」

誰かが言い出すと、途端に周囲も同調して大騒ぎ。ボクの名前を連呼して、指笛で囃し立てる。彼らが何を要求してるかと言えば、ボクが弾くハープ豎琴だ。

誰かが飲み代しろうに置いていった物をボクがちよっと弾いてみせたら、それが大評判。最初は旦那さんも置き場に困っていたけど、専用の舞台まで用意しちゃって大喜び。今ではサリクラーラの名物になりつつある。

でもボクは、気が向いたときしか弾かないから、どうしても豎琴を聴きたい人はサリクラーラに足繁く通うことになる。我ながら上手い仕組みだ。安売りしない方が有り難みも強いってもんでしょ。

で、今日は弾やく日。気分もいいし、天気もいいから。

雨の日はどうしても、弦が指に絡む感じで好きじゃない。

そんなわけでボクは、みんなの声援を受けて舞台へと上がった。豎琴が置かれているだけで他には何も小さいな舞台だけど、店内は総て見渡せるようになってる。

ボクは椅子に腰掛けると、弦の具合を見るように軽く爪弾つまびいた。うん、完璧。

途端に辺りが静まり返る。実に素直な反応だ。それを見て、ボクは演奏を始めた。

出だしは単音の繰り返しから。弾はじき出す音を徐々に大きくしていき、一瞬の空白から流麗な旋律へ。

それは、朝露が木の葉から滑り落ちて、川の流れと交わるが如く。

さらさらと鳴きながら、嬉しそうに春の来訪を告げる。

「春風と一緒に踊ろう。」
はるかぜ

小鳥と一緒に唄おう。

微笑む君と、二人で輪を作ろう」

こうして豎琴を弾いていると、王宮の暮らしを思い出す。お姉様と琴や笛の腕前を競い合った日々。勿論ボクは、お姉様のようにには上手く弾けなかったのだけど、負けん気だけは強くて、何度も挑戦していた。

遠い日に思いを馳せながら、ボクは豎琴を弾き続けた。豎琴を弾くと感傷的になってしまふから、本当に気が向いたときでないと弾けないんだ。

演奏に聴き入っている人。邪魔にならない程度に話をしている人。静かに酒を呷っている人。お客の反応は色々だけど、誰もが楽しそうにしている。それがボクには嬉しい。

楽しくお酒を飲んでもらえたら、満足。店も繁盛するし、給金もたんまり貰えるし。

そのとき

「邪魔するぜ」

豎琴の音色に誘われたのか、新たな客が店を訪れた。

ザワツと周囲の空気が変わる。

新顔だ。しかも、この界限では見掛けのないような感じの。身なりから推察するに、恐らく何処かのお屋敷で働いている人間だろう。そういう人間も数多く見てきたから、雰囲気で分かる。この店には似わない人間だ。

視界の端で男を捕らえながらも、ボクは豎琴を弾き続ける。折角みんなが楽しんでいるのだから、ボクの都合だけで演奏を中断することは出来ない。馴染まない客でも、そのうち慣れてくれるはずだ。

それにしても面白い顔だ。面長と言えば聞こえはいいけど、間延びした顔立ち。壺のような風貌だ。見まいとしても、大きな鼻に目が行ってしまう。足は長そうだから、後ろ姿は悪くないだろうに。

ふらふらと店内を歩きながら、男は独り言のように漏らした。

「ここは変わった見世物があるんだなア」

何故そういうことを言う。周囲の反感を買っているのが分からないの？ 黙って座れば誰も気にしないのに。

既に少し酔っているのか、男は虚ろな瞳でボクを捕らえながら、緩慢な歩調でこちらへ向かってくる。

ボクは無感動を装い、演奏を続けた。

嫌な客でも問題さえ起こさなければ文句は言えない。だから無視が最良の策だ。

周りの人間は、煙たそうな顔で、ぶつぶつと声にならない文句を

言い合っている。

男は舞台の前で立ち止まると、にやりと嫌らしい笑みを浮かべた。片方の肘を台上に置いて、寄り掛かる。そして何をするのかと思ったら、いきなりボクの裾を掴んで捲り上げたんだ！

露あひわになったボクの太股ふとももを見て、男が言う。

「色っばいねえ」

冗談じゃない！ さすがに演奏を続けることは出来なかった。

ぴたりと止まった演奏に反応して、周囲も息を飲んだ。一瞬の静寂を経て、辺りに緊張感が広がる。

皮肉にも、みんなの視線を受けているのはボクの足だった。こんな屈辱、久しく味わったこともなかったのに。

「お客様。他のお客様に迷惑ですので、お引き取りください」

忠告はした。これで引き下がらないのなら、ボクにも考えがある。と言うよりは、我慢の限界。

「こっやって裾を乱した方が、もっと色っばくなるぜ」

男は片方の手で裾を持ち上げたまま、もう片方の手で更に裾を開ひらこつと試みる。至って真面目な表情で。

「触るな、下郎！」

威厳を込めて言い放つと、ついにボクは立ち上がった。これでも我慢した方だ。

周囲からは「あーあ、怒らせちゃったよ」という溜息を混ぜ合わせた声が聞こえる。

「なんだと、貴様！ もういつペン言ってみろ！ 芸人風情が俺様に向かって下郎だア？」

男は、行き場を失った手を舞台に叩き付けた。キツと睨み付ける視線は、怒り一色に染まっている。齒噛みする音が聞こえてきそうな形相だ。

男が掴みかかろうとしたのを交わして、ボクは舞台から飛び降りた。ふわりと。

着地したのは男の背後。ボクは裾を捲り上げると、振り向きざまに男の背中に蹴りを叩き込んだ。これでも手加減したつもり。

前のめりに蹠^{ひき}跟^りめいて、男は舞台に倒れ込んだ。酒が入ってるから反応が鈍いんだ。

固唾を呑んで見守っていた人たちも、次の瞬間には破顔して喝采。指笛や拍手が店内を埋め尽くして、大変な騒ぎようだ。

男に罵声を浴びせる者。ボクの名を連呼する者。無意味に騒ぎ立てる者。酔っている所為で興奮の度合いも甚だしい。

周囲に煽られて、ボクも笑顔で投げキスを振りまく。両手で、何度も。

そして誰もが勝負は決したと思っていたときだった。

「クソがつ！」

大声で吠えると、男は舞台を叩き付けた。その迫力に気圧けおされて、周囲の喝采が止む。ゆっくりと振り向いた男の顔には、怒りに混じって殺気のようなものも浮かんでいた。

「けつ。気取つてみせたところで、所詮おまえも、男に媚めびなきや飯も喰えねえんだろ。そういう臭いがするぜ、ぶんぷんと」

「何が言いたい」

ああ、嫌だ。回りくどい言い方でボクを辱めようとする、その嫌味な根性が気に入らない。少しばかり教養があると、男は根性が曲がるのか？

もう怒った。

ボクは帯の後ろに隠していた懐剣を抜き放つと、突く体勢で構えた。

刃物を見て、男も怯む。

ざわめく声を耳にしながらも、ボクは構わず前に出た。男の首を目掛けて！

その場に居合わせた誰もが流血を想像したことだろう。標的とされた男も例外ではなく。

でも実際には、流血はなかった。ボクは柄つかの部分で男の左肩を突いただけだった。他の客にしても、酒の席で血は見たくないだろうから。

壺のような顔が激痛に歪む。男は声にならない呻きを上げて、左右に身体を揺らしている。

「痛そうだねー？ 折角だから、もっと痛くしちゃおうか？」

男の眼前に刃やいばを突き付けて、ボクは嫣然と微笑んでみせる。

「こんなことをしてタダで済むと思ってるのか」

鼻息も荒く、男はボクを睨み付ける。

でも、今度こそ勝負は決した。お仕置きも完了。これだけ面目を潰されたら、二度と顔を出せないはずだ。ここにいる客に顔を覚えられてしまっているから。

憤慨しながらも、男の足は店の外へと向いていた。息巻いて、悪態を並べてはいるけど、もう乱暴を働く気力もないらしい。肩の痛みに耐えて歩いているのが分かる。

完全に男の姿が消えるのを待って、ボクは奥へと引っ込んだ。

ちょうどそこには旦那さんが立っていて、優しい顔でボクを迎えてくれた。

「お見事でした」

冗談っぽい口調からも、ボクを信頼してくれているのが分かる。

旦那さんは、今年で三十三歳。口髭さえ生やしていなければ、まだ二十代に見える若々しさだ。中肉中背で、表情も柔らかいから、見た目には頼りなさそうだけど、実は相当に腕っ節は強い。いつも控えめだし、人当たりも良く、界限での評判は上々だ。

「ごめんなさい、旦那さん。我慢できなくて、つい……」

「構わないよ。ああいう客は有り難くないから。それより、『触るな、下郎』は良かったね。やっぱり何処かのお姫様って噂、本当だったのかい？」

のんびりしていそうだけど、旦那さんって意外と鋭いかも。

「旦那さん。ボク、男ですよ」

そうやってボクが口を尖らせると、旦那さんは楽しげに笑い飛ばして言うんだ。

「そうだった。つい忘れちゃうんだよね。常連客でさえミコトのこ」と女の子だと思ひ込んでるし」

「でも、お店のためにはその方がいいんでしょう？」

「分かってるねえ、ミコトちゃん。本気でうちの養女になる気ない？」

それは前から言われていること。でもボクは、誤魔化しながら断

り続けていた。だって、ここの養子いごもになったら暗殺の仕事が続けられなくなるから。守らなければならぬ大切なものがあつたら、危険な仕事は出来ないでしょう？

「お妾さんだつたら考えてもいいよ」

「ミコトちゃん……」

旦那さんは慌てた様子で言葉を詰まらせた。

「うそ。冗談ですよ。本気にした？」

「大人をからかうものじゃないよ。うちの女房が聴いてたら……あ
あ怖い」

その奥さん、実は厨房から聞き耳を立てていたらしい。

ボク、しーらない。

遭遇

「そう言えば、デユミール家で召使いの募集をしていたよ。商家しやうかの連中がお世話をしようとする目の色を変えていた。彼らは、どうにかして侯爵家との関係を得たいらしい」

それが新たな仕事の始まりだった。お膳立てするのは伯爵の役目。ボクは、指示に従って任務を遂行するだけだ。

相変わらずの優雅な物腰で、物憂げにボクを見つめている。決まった場所を好むらしくて、伯爵が座る椅子はいつも同じだった。似たような椅子が幾つも並んでいるのに。

「ノールボワ家に推薦状を書かせた。行ってくれるかね？」

「でも募集してるのは女でしょ？」

「だからこそ、ミコトに頼むのだ。淑やかなだけの女では、到底この仕事は遂行できないだろう。ましてや力攻めで落ちるような相手でもない」

「そんなに手強いの？」

「ランシー・デユミールかしやうぐん火將軍。ミコトも名前くらいなら聞いたことはあるだろう？」

「全然」

だって興味ないもん。他人だし。

素っ気ないボクに対して、伯爵は微笑。

「宜しい。だが、これだけは言っておく。恐らく奴には隙がない。安易な色仕掛けに頼るな。それから今回は、一ヶ月以内に遂行できれば成功とする」

伯爵にしては珍しく慎重な物言いだ。デュミール侯爵というのは、余程の相手なんだろうね。

「任せてよ、必ず惚れさせてみせるから」

「だからミコト、そうではなくて」

「なに？」

「分かっているのか？ これまでの相手とは格が違うのだよ」

「うん。侯爵でしょ？」

いくら歴戦の猛者でも剣を抱いて寝たりはしない。必ず隙は出来る。作ってみせる！

気のせいか、伯爵はボクを見て呆れた顔をしているけど、どうしてなんだろうね。心配性なのかな？

何はともあれ、ついに伯爵が本格的に動き出した。ような気がする。今までも何度か大物を標的にしてきたけど、侯爵と言ったら国王に次ぐ人物だ。伯爵にとっては、恐らく最大の政敵。逆に言えば、伯爵の正体は、デュミール侯爵と競い合うような人物という結^と

論になる。

今の関係を壊したくないから敢えて詮索はしないけどね。

そんなわけで、ボクは意気揚々とデュミール家へと向かった。

夜会に出るなら赤い振袖だけど、今日は若紫の訪問着で行く。あまり目立ちすぎないようにね。でも伯爵の要望で、ちゃんと髪を結わいて出てきたんだ。

ノールボワ家の推薦状があると言っても、他にも候補はいるらしいから、ボクが選ばれるとは限らない。少しでも相手の印象を良くしておかないと、屋敷に潜入すら出来ずに終わる。なんてことも有り得るわけだ。

ここは気合いを入れて頑張らないと！

そうして考え事をしながら、侯爵家へと続く川沿いの道を歩いているときだった。前から、真っ白な猫がボクの方に向かって走り寄ってきたんだ。ふさふさの長い毛で、瞳の色は鮮やかな緑。ちよこちよここと走ってくる姿があまりに可愛らしくて、ボクは思わず破顔した。

屈かがんで両手を広げてみせると、その猫はボクの懐に（ふところ）飛び込んできた。そのまま猫を抱き上げて、ボクは顔を近づけた。

「やわらかーい」

毛並みは綺麗だし、人に飼われていた猫に違いない。捕まえなく

ても向こうから飛び込んでくるなんて、きつと人恋しかったんだらうね。

ボクは白い猫を胸に抱いたまま、再び歩きだした。暇がないから飼い主は見つけて上げられないけど、侯爵家の庭で密かに飼うというのも悪くない。ずっと大人しくしてるし、この猫もボクを気に入ってくれたんだよね？

名前、何がいいかなー？ 気品があるから『伯爵夫人』とか『ひめひめ』とか、もつと捻って『水辺に佇む白鳥の王』なんて、いいかも知れない。

ま、いいや。あとで、ゆっくり考えよう。

にこにこして歩いていると、またしても前方から走り寄ってくる。今度は人影が見えた。

まさか、この猫の飼い主？ もう見つかったの？ つまんない！ 折角ボクが飼おうと思ったのに。

案の定、男はボクの前で立ち止まった。四十歳くらいの痩せ形の男で、その手に紐の付いた首輪を持っている。

息急切いきせきせきって、苦しそくに顔を歪めたまま、男はボクに人差し指を向けた。馬のように息遣いが荒くて、顔色も良くない。よほど慌てていたんだらうね。

「その猫です。ああ良かった」

人好きがしそうな柔和な笑みを浮かべて、男は安堵の息を深々と

ついた。

「この猫、おじさんの？」

飼い主が見つかったのは嬉しいけど、ちょっと残念。でも優しそうな人で良かった。

ようやく呼吸も整ってきたのか、男は深い息を何度も繰り返した。

「いえ、その、奥様の猫でして、御不浄のために馬車から降ろしましたところ、逃げられてしまったのです」

「じゃあ、返すね」

名残惜しいけど、お別れ。

猫を引き渡そうと、相手との距離を詰めて、立つ。両手で差し出すのではなくて、腕に抱いたまま相手の胸元へと送り込むように。

ところが猫が動いてくれない。ボクの腕の中に居座ったまま身体からだを丸めている。

何をためらっているのか、相手の男も恐々としていて、なかなか猫を受け止めようとしない。落ち着きのない様子で、頻りに視線を上下させるばかり。

もしかして猫との相性が悪いのかな？

「猫が苦手なの？」

「いえ決して、そのようなことは……」

「じゃあ早く」

ボクも先を急いでるし。もし約束の時間に遅れたら、どうしてくれるの？

「はい」

そんなに畏まらなくてもいいと思うのに、何故か返事も凄く堅い。しかも返事をしただけで、やっぱり先に進まない。

どう見ても猫を怖がってると思えないんだけど……。

「猫、苦手なんですよ？」

別に隠さなくても、恥ずかしいことじゃないのに。

それなのに！ この人って頑なに否定するんだもん。

「いいえ。断じて、そのようなことはございません。ただ……」

なんて要領を得ない人なの？ お願いだから早くしてよ！

身なりから判断すると、身分のある人に仕えている御者という感じだ。似たような短剣を佩いている御者を、他で見たことがあったし。

「ただ？」

ボクが促して上げないと、話も先に進まない。何やら困り果てている様子だ。

「何と申し上げれば良いのか……」

「うん。それで？」

「あの、お嬢様……」

そこで何故か、男は一步ほど下がる。

ボクは反射的に後ろを振り向いてしまった。

でも、誰も近付いてくる気配はない。それらしい人影は皆無だ。

何処に、お嬢様？ ボクが不思議がつて小首を傾げると、その腰の低い男は更に畏まって、こう言うんだ。

「御無礼とは存じますが、あちらの馬車まで御足労を願えませんでしょうか？」

こんなふうに慇懃な態度で接せられると、逆に言葉の裏を探りたくなってしまう。

でもボクは急いでいたし、深読みして時間を浪費するのも嫌だったから、すぐに承知したんだ。向かう方角が逆だったら断ったかも知れないけど。

結局ボクに猫を預けたままで、男が前に行く。彼は認めようとしていないけど、猫が苦手としか思えないね！

そうして連れられていった先には、果たして豪華な馬車が待ち受けていた。

細部の絢爛な飾り立てにも負けない、重厚な造り。黒鹿毛の二頭立て。御者の男は些か頼りない感じだけど、総てが高貴な匂いを漂わせている。馬車に乗っている人物は、間違いなく上級貴族だ。

この辺りは貴族の屋敷も多いし、どんな人が現れても驚かないけどね。

予想は、ほぼ的中。馬車の中から出てきたのは、期待を裏切らない優美な淑女だった。

年は二十歳くらい。若くて、本当に綺麗な「奥様」だ。陽光を受けて輝く金髪も、申し分なく美しい。品がある柔らかな顔立ちで、大きな目が愛らしく、如何にも人に好かれそうな雰囲気を持っている、生まれながらのお嬢様だ。

「まあ、わたくしのブランドンを連れてきてくださったのね」

ふわりとした柔らかい微笑みがボクに向けられる。ボクの腕の中で丸くなっている猫にも。

彼女が両手を差し出すと、猫は待っていたかのように向こう岸へと飛び移った。つまり御主人様の胸に。

意外と呆気ない別れだった。猫って薄情だね！

「では先を急ぎますので、これにて失礼させていただきます」

相手の身分も考慮して、ボクは慇懃な挨拶を交わした。一刻も早く侯爵家に辿り着きたいという思いからも、既に足は目的の方角へと向いていた。それなのに！

「お待ちになつて」

たった一言で、呼び止められてしまった。

まだ何か用があるの？ それとも文句でも言われるわけ？

定刻までに行かないと、いくらノールボワ家の推薦状があつても印象が悪くなる。最初が肝要なのに、ここで躓いたら総てが終わっちゃうじゃない。

「当家までお越しくださつたら、充分なお礼が出来ると思いますが」

猫を捕まえたくらいで大袈裟な。と思つたけど、そんなこと言えるはずもなく、ボクは思案に眩れた。

彼女の「お礼」に付き合っていたら、間違いなく約束の時間には間に合わない。やはり断るしかないのだけど……。

「過分なお心遣い、有り難く存じます。ですが、本日は大切な用事を仰せ付かっておりますので、御容赦くださいませ。お断り申し上げる御無礼を、お許しただければ幸いです」

身分が高い相手の「お礼」は、受け入れるのが妥当。下手に断れば面目を潰すことになるから、慎重に言葉を選ばないと失敗することになる。

「分かりました。ではお礼として、あなたを目的の場所まで送って差し上げますわ。それなら構わないでしょう?」

結局それが最終的な妥協点だった。

四人掛けの豪華な馬車に乗せてもらって、ボクたちは一路デユミール家へと向かった。

向かい側の座席には、護衛と思われる寡黙な男が、正面にボクを見据えながら座っている。そして彼の隣が猫。ボクの隣には、何処の誰かは知らないけど「奥様」だ。

驚いたことに、彼女もデユミール家へ向かう途中だったらしい。彼女は「奇遇」の一言で片付けていたけど、ボクにとっては聞き逃せない事実だ。

侯爵家に入りにできて、なおかつ「奥様」と呼ばれるような人物となれば、邸で働くボクにも決して無関係ではないはず。しかも身分の差は明らかだ。

問題は、どの程度ボクに関わりのある人物なのか、ということ。

まさか召使いの雇用にまで影響を及ぼすようなことはないと思うけど、「お礼」を受け入れてしまったのは失敗だったかも知れない。

いきなり「お客様」と馬車で乗り付けたら、遠慮というものを知らない不束者と思われるしまう可能性はある。ああ、めんどくさいことになった。

「ところで」

と、彼女はボクの顔を窺うような仕種。言葉を搜している感じだ。そこでボクは、すかさず「ミコトです」と名乗った。

「ミコトさんは、どのような御用で屋敷にいらっしゃるの？」

あれ？ 変な言い方じゃない？

「実は、侯爵家で働かせていただきたいと存じまして……」

「わたくしには嘘は仰有らなくても宜しいのよ？」

それは予想外の一言だった。

いきなり核心を突かれて、ボクは驚嘆した。幼少より滅多なことでは感情を表に出さないよう教えられてきたから、顔色までは変わらなかったと思うけど、心臓の高鳴りだけは抑えられない。

それでもボクは平静を装い、小首を傾げて理解が及んでいないような素振りを見せた。

「嘘、ですか？」

「本当は、侯爵様に御用がお有りなのでしょう？」

まさか本当に露見した？ でも何故？

「私は侯爵様のお顔も存じ上げないのです。いったい如何様な用向きがあるのでしょうか？」

心臓に悪い。もし本当に露見しているのなら、こんな問答こそ無意味。早々に馬車から飛び降りたい気分だ。

「ねえ、ミコトさん」

「はい」

「わたくしにだけは、そつと教えてくださらない？」

「そう仰有いまして……」

ボクは困り果てた顔で、向かい側の男に助けを求めるような視線を送った。実際ボクは返事に困っていた。

でも本当に助けてもらえるとは全く思っていなかった。だって顔が怖かったし、初めから一言も喋らないし。

「奥様。本日は、新しい召使いを雇い入れるために、五人の候補が屋敷を訪れることになっております。恐らく、この娘も候補の一人なのでしよう」

意外にも流麗な口調で、男はボクの代弁をしてくれた。つまりはボクの窮地を救ってくれたわけだ。感謝！

でも感謝ばかりもしていられない。何故って、「奥様」の正体を知ることになってしまったから。

「まあ、そうでしたの？ それなら初めから仰有ってくださったら宜しかったのに」

言ったよ！ ボクとしては大声で反論したい気分だった。

いったい何を勘違いしたのか。思い込みが激しい人物であることには間違いない。

デュミール侯爵夫人セライスタ 何て疲れる人なんだ！

この人が今日からボクの「奥様」になるかと思うと、頭が痛い。

そして更に、追い討ちの一言。

「わたくしはてつきり、あの方が見初めた女性かと……」

つまり彼女は、ボクのことを侯爵の妾か何かと勘違いしていたんだ！ 正体が知られたかと思って慌てふためいたボクって、いったい？

面接

召使いの候補は全部で五人。ボク以外の候補は勿論、総て女だ。ボクの眼識に間違いがなければ。

他の四人が総て金髪というのも気に懸かるけど、ボクが控え室に現れた途端、周囲に緊張感が走ったのは何故だろうね。みんなの視線に敵意のようなものを感じるんだ。

審査は、ひとりずつ面接をして行われる。侯爵家の執事が、独断と偏見で選ぶらしい。つまり執事に気に入られることが肝要だ。

順番はボクが最後。どうやら屋敷に来た順番が面接の順番になっているようだ。

ようやく順番が回ってきた頃には、ボクは待ちくたびれて、今にも寝てしまいそうになっていた。

四人目が執務室から戻ってくるのを見て、ボクは立ち上がった。擦れ違うようにして、今度はボクが部屋を出ていく。

廊下を挟んで向かい側が執務室だ。部屋の前では若い男が立っていて、無言で扉を開いてくれた。

ボクが部屋に入ると、後ろで扉が閉められる。鍵こそ掛けられていないけど、まるで閉じ込められたような感覚だ。

机に向かって座っている人物が、恐らく執事のガイド・ジルラー。伯爵から切れ者だという話は聞いていたけど、ボクの想像より少し

若くて、三十代前半くらいだ。

切れ長の目に薄い唇。鼻が高くて顎の線も鋭角的。とても優しそうな人間には見えないね！

感情を押し殺した冷ややかな視線が、ボクの首に絡む。

品定めでもされているような気分だ。

鋭すぎる視線は凶器。見つめられると、その部分が穴を穿たれたように痛む。

胸……腰……太股の辺りを通って、足許へ抜ける。

彼の眼力は恐ろしい。裸で立たされているような気分になる。有り得ないことなのに、看破されるのではないかと危惧してしまう。

こうして立っていることは、拷問にも等しい。他人の視線に晒されることが、これほど苦痛になるとは。

この男だけは怖い。ボクの勘が危険を告げている。

もし侯爵と同じ種類の人間だったら、任務は失敗するかも知れない。ふたりきりになったら怯えてしまっただろうから。

「当家で働きたいと考えるからには、それなりの覚悟があって参ったのだらうな？」

初めて彼が口を開いた。意外にも柔らかい声質だ。

「はい」

流れで思わず肯定しちゃったけど、間違いだっただか？ 物言わぬ瞳が、ボクに肯定させたんだ。抗うことも許さず。

「では服を脱ぎたまえ」

やられた！ そんな手口で反応を見るなんて、やり方が汚い。

選択肢は三つだけど、ボクの場合「従順に従う」ことは出来ない。だって、着物を脱ぐのは不味いでしょう、やっぱり。男だって分かっちゃうし。それに、帯に隠した懐剣が見つかるのも好ましくない。

そうになると、残りは「強気に断る」か、それとも「弱気に許しを請う」か。

出来ることなら従順で淑やかな人間を演じたかった。でも仕方ない。

「お断りいたします。私は娼婦ではございませぬ故」

迷って立ち尽くしていても印象は悪くなるだけだから、ボクは思い切って強気に出た。この判断が正しかったかどうかは、現時点では分からないけど。

「それを確かめるのは私だ」

ジルラーは顔色を全く変えない。つまり、ボクの反応も予想の範疇だったという意味？

強気に出れば少しは驚いてくれると思ったのに。

「では申し上げますが、私は高^{たか}づございます」

「如何程^{いかほど}だ？」

それを訊くの？ 高すぎて腰を抜かしても知らないよ？

「城ひとつ」

落ちぶれても、ボクは堯^{ギョーム}矛の王子だ。誇りを売り渡す値段として
「城ひとつ」なら、むしろ安いくらいでしょう？

さすがにジルラーも驚いた顔をしている。つまり、それは相手の
予想を超えた証拠だ。

もしかして、勝った？

ふと見ると、ジルラーが笑っている。愉悦を抑えられない様子で、
小さく喉を鳴らして。

それまでの冷ややかな態度からは想像できない姿だ。

感じわるーい。何処まで人を馬鹿にすれば気が済むわけ？

「誰の入れ知恵かは知らんが、面白い」

「お買い求め、いただけますか？」

「いや、私には無理だな。閣下を買っていただくごう」

閣下とは、デュミール將軍閣下のことを言う。即ち、侯爵家で働くことが許されたわけだ！

拍子抜けというか、あっさりというか、最後は意外と簡単に決まってしまった。こうなると、それまでの四人が気の毒にも思えてくる。でも、そんなことは言ってもらえない。ボクにとっては、デュミール侯爵の首に近付く、大事な一歩なんだから！

どういふ基準で選考したんだか、全く以て理解不能な面接が終わると、ジルラーはボクに「付いてこい」と言った。立つと、やっぱり威圧的だ。怖いから、こっち見ないで。行くから、そっち向いて！

その目が語ってるんだよね。おまえは目を離すと迷子になりそうだ、って。

それにしても、屋敷の広さが半端じゃない。従って部屋数も半端じゃない。

通路も複雑に入り組んでいて、さながら迷路のよう。建築した人間の趣味が窺えるね。

まずは屋敷の構造を覚えないと、ほんとに迷子になってしまう。

執事のジルラーが連れてきてくれたのは、召使い（ボク）の寝室まで。用が済むと彼は「当家のことは同室の者に教えてもらおうとい」と言い残し、さっさと何処かへ行ってしまった。

なんて薄情な奴　と愚痴ったところで仕方ないから、ボクは「同室」の顔を拝むことにした。

扉を叩いて、中の反応を待つ。ちなみに侯爵家では、「極めて丁寧な女言葉」を使わなければならないから、気が張るなあ。

程なくして、中からひとりの少女が顔を出した。年はボクと同じくらい。茶色の髪で、瞳も同系統の色。全体的に地味な印象を受けるけど、上品そつで好感は持てる。顔立ちも整っているし。さすが侯爵家、と言ったところかな。

「話はジルラー様から伺っています」

そう言いながら、何故か彼女はボクに対して戸惑いの色を覗かせている。ボクを見つめる目が普通じゃないんだよね。

そんなに堯矛の人間が珍しいのかな？

「何か？」

「あ、ごめんなさい。あまりに綺麗だから見惚れてしまったの」

本気なのか、冗談なのか、普通は面と向かつては言わないよね。でも、不快な視線ではないし、少なくとも彼女が好意的であることは分かった。

さほど広くもない部屋にベッドがふたつ。他の家具は共用で、私物を隠しておけるような場所はない。小柄こづかを持ってこなかったのは正解だ。懐剣だけなら言い訳も出来るし。

暁矛の習慣だとか、母の形見だとか、その気になれば言い逃れる術すべはいくらでもある。実際、お母様が愛用していたわけだし。問題なのは、むしろ彩王家の紋章サイオウが入ってることだったりする。尤も、他国よその人間は彩王家の紋章なんて知らないとは思うけどね。

六芒星に燕子花カキツバタ

それが彩王家の紋章だ。

「箆笥は上を使って。前の人が使っていた物も残っているけど、あなたなら服も着られると思うし」

「前の人って？」

「実家から結婚の話が来て、少し前に辞めていった人なの。本当は私が着たかったんだけど、腰が窮屈で」

見たところ決して彼女も太くはないけど、可愛い丸顔から察するに、ボクほどにはやせ形ではないのかも知れない。でも、一般的には好まれる体型だ。

「私に似合うかしら？」

「あなたなら、どんな服を着ても似合うと思うわ。試しに今から袖を通してみる？」

人前で着替えるのはちょっと不味い。お風呂も気を付けなきゃならないし、色々大変そうだ。

「そうね。でも、まだ邸のことを何も知らないし、先に邸内を案内していただけると助かるのだけど……」

「ええ、いいわ。侯爵様がお帰りになる前に一回りしてしまいましよう」

斯くしてボクは、同室の少女に引き連れられて屋敷の中を見て回る事になった。

彼女の名前はクラリーニア。ボクよりひとつ年下の十六歳だそうだ。

召使ボクたちの部屋が一階の東側にあるのに対して、侯爵の寝室は四階の西側だ。覚悟はしていたけど、ちよつと遠い。と言うより、いちばん遠い。これじゃ忍んでいっても誰かに見付かっちゃうじゃない！

夫人の部屋は四階の東側にある。つまり、この邸で最初に朝日を見るのが夫人なんだ。これを贅沢と呼ぶのか、そうでないのか、ボクには分からないね。

屋敷の中を歩き回っていれば当然のように色んな人と出くわすことになる。面白いことに、最初は誰もボクのことを召使いだとは思わないんだ。で、何と間違えるかと言えば、これが笑っちゃうんだけど、「姫」だ。

その度にボクは吹き出すのを我慢して、「私は新参の召使いでございます」って説明しなくちゃならない。

やっぱり隠していても育ちの良さが滲み出ちゃうんだよね。もっと目立たない格好で来れば良かったかも。

そんな感じで邸内を歩き回っていたら、侯爵が帰ってきたという知らせが飛び込んできた。ようやく顔を拝める、というわけで、ボクは喜び勇んで侯爵を出迎えることにした。他の召使いと一緒に。

毎回ちゃんと出迎えば印象も良くなるだろうし、早く顔も覚え
てもらいたい。

侯爵に気に入られなければ近付くことも難しいし、暗殺なんて不
可能だ。正面から渡り合ったら、ボクなんか一撃で倒されちゃうだ
ろうから。

何しろ、相手はリユノック屈指の勇将と謳われるラン＝シー・デ
ユミール 烈火の將軍だ。きつと怖い顔の人物に違いない。

そんな想像とは裏腹に、ボクから見た侯爵は普通の青年だった。
二十七歳という若さで火將軍の地位に立っているのだから、かなり
の遣り手なんだろうけど、少なくとも怖い感じはしなかった。

ほっそりとした長身に加えて、端正な顔立ち。赤っぽい黒髪も魅
力的だ。

幼い頃から見慣れている所為か、金髪よりも黒っぽい髪の方が馴
染みやすい。

俄然やる気が湧いてきた。やっぱり相手が美形だと気分的にも違
うよね。

絶対、ラン＝シー・デユミールを落としてみせる！

「お帰りなさいませ」

意気揚々。クラーニアと声を揃えて挨拶。

でも侯爵は、ボクの方を一瞥しただけで、殆ど無視。ずっと無表情を突き通している。まるで眼中にない感じだ。

最初はこんなもんなのかなー？ それともボクに魅力がないのかな？

「アルウィリア」

侯爵が話し掛けたのは他の召使いだっただけ。ボクより三つくらいは年上の、大人っぽい女性だ。

「はい」

「ジルラーに、部屋まで来るようにと伝えてくれ」

「畏まりました」

アルウィリアが背を向けたのを見届けてから、侯爵も去っていく。結局、侯爵がボクの方を見たのは一度だけだった。

それが最初の出会い。思ったよりも任務は難航しそうな気配だ。ボクは溜息をひとつ。

伯爵う。こんな相手をどうやって落とすわけ？

窮地

召使いにも序列はある。主人や執事に、よっぽど気に入られれば別だけど、基本的には仕えた年数で、給金や仕事の内容も変わってくるらしい。下っ端のボクには、必然的に嫌な仕事が回ってくることになる。同室のクラーニアから説明を受けるまでは軽く考えていたけど、なんだか思ったよりも大変そうだ。

先輩方の頼み事　　という名の命令も、断ることは難しいのだから。

そつなく、目立たず、従順に。これが召使いに求められる三原則だつてクラーニアは言うけど、もしかしてボク、正反対の行動を取っていたりする？

奥様の馬車で乗り付けたばかりか、面接では大きいこと言っちゃったし。この上、そつなく仕事をこなせなかつたりしたら、召使いとしての立場が危うくなりそうだ。気を付けよう。

今更だけど、こういう場所で暁矛の着物は目立つ！

召使いが似たような格好をしているから尚更だ。

まずは目立たない格好だ。前の人が使っていたという服に袖を通してみよう。地味だ。

確かに目立たないけど、同時に、ボクの魅力も溢れ出ない。どうやったら侯爵にボクの魅力を気付かせることが出来るんだろう？

まあ、一ヶ月もあるんだし、焦る必要はないかな。長期戦も視野に入れて、じっくり構えることにしよう。

幸い、同室のクラーニアはボクに対して好意的だから、困ったときは、きつと力になってくれるはずだ。

なんて言っていると、早速困ったことが起こった。しかも、そんなときに限って、側には誰もいなかったりするんだ。

仕事が割り振られる前に、屋敷の全体像だけでも把握しておこうと思い、あちこち歩き回っていたときのことだった。ひとりの男が厨房から出てきて、ボクに言うんだ。

「おまえ、何処かで会ったことはないか？」

やや視線を下げて歩いていたボクは、最初その相手が誰なのか分からなかった。声に聞き覚えがあるような気もしたけど、侯爵家に知り合いはないし、いつものことで口説かれているのかと思ったんだ。相手の顔を見るまでは。

何気なく見遣ると、そこには確かに見覚えのある顔があった。

間違いない。会ったことがあるのだ。相手の記憶が正しい。

そう簡単には忘れられない壺のような顔。まさしく彼は、サリクラーラ居酒屋に現れた酔漢だ。ボクに痛め付けられて帰っていった、あの。

でも何で、あの無礼な男が侯爵家にいるわけ？ しかも厨房に？

身なりから判断すると、まるでちゅうぶ廚夫みみたいな格好だけど、まさか

壺みたいな顔で料理を作ったりするの？ それをボクも食べるの？

「お人違いでしょう」

やばすぎる。あのことを根に持たれていたら、どんな仕返しが来るか分からない。

懐剣が使えるなら、ちつとも怖い相手じゃないんだけど、邸内で騒ぎを起こすのは不味いし、ここは知らん顔だ。

「そうか、あのとときの小娘！ 新しい召使いを雇ったという話は聞いていたが、おまえがそうなのか？」

相変わらず無礼で尊大な男だ。酔っていないくても殆ど変わらないんじゃない？

「何を仰有っているのか、私には分かりかねますが」

「印象が違っているから別人かとも思ったが、その黒髪だ。忘れるはずがない」

壺のような顔がボクに迫ってくる！

頼むから、その顔をボクに近付けないうで欲しい。苦手なんだよね、品のない顔って。近付くだけで鳥肌が立つ。

男がボクの髪に触れようとすると、それを逃れて後退すると、じわりじわりと追い詰められて、壁際に立たされてしまった。

相変わらず壺のような顔が目の前にあるし、嫌らしい視線が肌に

突き刺さって、気分が悪い。こんな男と見つめ合つのは嫌だから、ボクは僅かに視線を逸らした。

「堯キョーム矛の人間なら黒髪が普通です」

「いいのか？ 俺が一言、おまえが今までどういう仕事をしてたかを告げれば……」

つまり脅迫？ それは不味いかも。推薦状ではノールボワ家で働いていたことになってるから、街の居酒屋なんかで働いていたと知れたら疑われちゃう！

「何と仰有ろうと、私には身に覚えのないことでございます」

「ああ、そつだ！ ミコト。確か店の奴がミコトと呼んでいたな」

「だから、どうだと仰有るのです？」

絶体絶命！ 断崖絶壁！ 名前まで覚えられていたら言い逃れは出来ない かも。

「給金の半分、いや、四分の一で手を打とう。そうすれば、おまえのことは黙っててやる」

男はボクの耳許に顔を近付けてきて、息を吹きかけながら更に言う。

「どつだ？ 悪いようにはしない」

どつやらボクを追い詰めたつもりになっているらしい。

実際、凄く追い詰められた気分だけど。

この男を始末すれば、侯爵に警戒されて、任務の遂行が困難になる。と言って受け入れれば、この先も強請ゆすられることになるだろうし、カラダを狙ってくるかも知れない。

想像するだけで寒気がしてくる。

仕方ない。ここは強気で行こう！

「仰有りたければ」

言いかけて、ボクは目を瞠みはった。

廊下の向こうに見えた人影は、侯爵夫人セイイスタ。もしかしたら助かったかも！

ボクは咄嗟に一計を案じた。

「おやめください！」

ボクは夫人にも聞こえるように大きな声を上げた。

今の体勢なら、明らかにボクが迫られているように見える。これを逃す手はない。相手を悪者に仕立て上げればいいんだ。

夫人がボクの声に気付いて、こっちを見た。

「どうか、御容赦を」

怯えた演技を見せるのは、夫人に対して。

目の前の男は訝しげに顔を曇らせる。彼はまだ夫人の存在に気付いていない。

「そこで何をしているの？」

来た。凜とした声の主こそ、セライスタその人だ。

そのときようやく男も気付いて振り向いたけど、もう取り繕えな
いはず。

侍女を従えて歩み寄ってくる夫人の姿を見て、男は慌てて向き直
った。

「あ、これは奥様。今日も良いお天気で」

「何をしているの、と訊いているの。答えなさい」

夫人の追及は厳しい。

勝ったかも。ボクは密かに北叟笑んだ。

「奥様……」

ボクは胸に手を当てて、少し落ち着かない素振りを見せた。勿論
それも演技だ。

「なに、ミコト？ 遠慮しないで仰有ってみて。わたくしはあなた

の味方ですから」

「申し上げにくいのですが、この方が『屋敷で可愛がって欲しければ、給金の半分を寄越せ』と強要してきて、身体にも触られて……」

ちよつと嘘も混ぜて、泣き真似をしてみせる。口許に手を持ってきて、僅かに上目遣い。怯えた仕種で男を見れば、誰が見たって被害者はボクだ。

しかも、夫人はボクが迫られているところを見ている。完璧！

「違います!」

男も反論したけど、ボクの言葉を覆すことは難しいと思うよ。

「お黙りなさい。邸内での不埒な振る舞い、ちゅうふうちやう 廚夫長として恥ずかしいとは思わないのですか?」

廚夫長? この男が? 壺のような顔なのに? 意外だ。驚きだ。

「奥様は、来たばかりの娘と、十年も仕えた私と、どちらの言葉を信用なさるおつもりですか? 私は、この娘が申すようなことは、いつさいおこなっておりません」

そう来る? 往生際が悪いね。

「わたくしは、ミコトの心根を信じます。なかなか人には懐かないブランドンが、ミコトには甘えていました」

もしかして、猫に逃げられたのも一度や二度じゃなかったりして。

「ならば申し上げますが、この娘は街の居酒屋で働いていた酌婦なのです。この屋敷に奉公に上がるために裏で何をしていたか、分かったものではありません。デュミール家には相応しくない人間です」

この廚夫長、思ったよりも言葉が巧みだ。

「本当ですか、ミコト」

夫人がボクに疑いの眼差しを送る。まだ廚夫長の言葉を信じたくない様子だけど、ボクの返答によっては信頼を失うことも有り得るわけだ。

どうする？

恐らく夫人は世間のことを熟知していないから、誤解があるかも知れない。「酌婦」と聞いて「娼婦」を連想しているようなら、ボクに対する印象は最悪だ。

「本当です」

こうなったら一か八かだ。夫人の判断に賭けてみる。

「まあ」

夫人の驚きは大きい。ここで彼女に考える時間ひまを与えないことが肝要。

「御存じかも知れませんが、私は堯キョーム矛の民でした。先の内乱ないらんを逃れて移り住んできた者のひとりです。居酒屋の御主人は、そんな私を

哀れに思つて養女にしてくださいました。その居酒屋で給仕をしていたことは事実です。しかし、ノールボワ家での働きが認められたからこそ、推薦状もいただけたのです。先日、お屋敷に上がる前に親孝行をしておきたくて、店で仕事を手伝つておりました。そこを、この方に見られてしまったのです」

ボクは休むことなく一気に言葉を連ねた。

今の弁明を聞けば、廚夫長がボクを強請ゆすつていたことにも信憑性が出る。

あとは夫人の判断に委ねるしかない。

緊張の一瞬だ。隣で壺顔つぼがおの廚夫長も息を飲む。

「ミコト。よく打ち明けてくれました。あなたの親孝行の気持ちに免じ、咎め立てはいたしません。これからはデュミール家に尽くしてください」

勝つた！

「奥様！」

顔色を変えた廚夫長が、最後の抵抗を試みようとしたけど、夫人はそれを許さなかった。

「あなたには用はありません。早々に新しい奉公先を探すことを勧めます。腕は悪くないのですから、これからは真面目に働くことですね」

「奥様！」

食い下がる廚夫長の言葉には耳を貸さず、夫人はボクに優しい微笑みを向けた。

「いらつしゃい、ミコト。あなたには、わたくしの側の仕事をお願いしたいと思います」

斯くしてボクは、デュミール侯爵夫人セライスタの側で働けることになった！

哀れな廚夫長は、ボクを強請^{ゆす}ろうとしたばかりに解雇される憂き目に遭った。

見事なものでしょ、伯爵う。ちゃんと褒めてよね！

花束

なぜか夫人に気に入られてしまったボクは、新人の召使いとしては異例の出世を果たした。ボクのような立場だと、他の召使いから妬まれやすいから気を付けた方がいいんだって。ちよっぴり羨ましそうに、クラーニアが教えてくれた。

どんな仕事待ち受けているのかと思ったら、夫人の愛猫ブランドンの世話をしたり、花に水をやったり、紅茶を淹れたり、片手間で出来るようなことばかりだった。

日がな一日、夫人の側にいて、用があれば聞く。なければ、ぼんやりする。これでいいのかなー？

夫人に近付きすぎた所為で、逆に動きが制限されてしまったような気がする。

もつと、こつ、てきぱきと働いて、少しずつ侯爵にも近付けたらなんて思い描いていたけど、このままだと侯爵との接点が全くない！

仕方がないから今は、夫人の信頼を得ることに専念しよう。時間はあるんだから慌てることはないし。

そんなわけでボクは、夫人に言い付けられて、庭園へと足を運んだ。庭師の男に花を貰ってくる、というのが今回の仕事だ。簡単！

別棟に庭師の父子こいが住んでいて、彼らに頼めば適当な花を見繕ってくれるらしい。夫人は何も注文を出さないから、最終的にはボク

の判断に委ねられることになる。それを夫人が気に入るかどうかは別だけど。

色とりどりの花や樹木が植えられた庭園で、熱心に働く青年の姿を発見！ せっせと土を掘り起こして、新しい苗木を植えているところらしい。恐らく息子の方だ。

ひよろつとした痩せ型で、手足が長い。木登りが得意そうな印象を受ける。ボクの勝手な想像だけどね。

「お花をいただけるかしら？」

ちよつと気取って、ボクは青年の背中に声を掛けた。いや別に、気取らなくてもボクは普段から優雅なんだけど。

作業に没頭していたかった、という感じで、めんどくさそうに青年が振り向いた。汚れているからだけでなく、田舎臭い風貌だ。ボクを見つめたまま黙りこくっているけど、ちゃんと聞こえてるのかなー？

「聞いていらっしやる？」

「あ、はい。花ですよ。どうぞ好きなのを選んで」

青年は、擦り付けるようにして服で手を拭くと、その手を花畑へと向けた。

今、手を拭う必要があった？

「あなたが選んでくださる？」

夫人の好みも分からないのに、ボクが選べるわけがない。ここは手慣れた彼に任せましょう。というわけで、にっこり。

そう言えば、無闇に笑顔を振りまかない方がいいかって伯爵に言われたことがあったけど、どういう意味だったのかな？

笑わない方が魅力的？ ちょっと違うような気がする。

何しろ多くを語らない人だから、意味不明なことも多いんだ。伯爵に言わせれば、話を聞いていないのはボクの方らしい。

結局、その若い庭師に選んでもらって、ボクは抱えきれないほどの花束を夫人の部屋に持ち帰った。

たかが花束と思っていたら、意外と大変だった。花が多すぎる。とても優雅な仕事とは思えないね！

ところが夫人は、「いつもの倍はあるかしら」なんて言い出すんだ。つまり庭師の青年は、ボクが何も知らないからって、無茶な量の花を持たせたんだ！

信じられない。そういう意地悪するか、ふつつ。最初から様子がおかしいとは思っていたけど、今度からは要注意だ。

「折角だから半分はランシー様のお部屋にも生けてくださる？」

願ってもない好機が巡ってきた　　と言いたいところだけど、そういう用件は侯爵が屋敷にいるとき言っただけだ。欲しい。

うちの侯爵様って昼間は殆ど屋敷にいないから、会えるとしたら朝と夕刻だけだ。

「寢室、ですか？」

その問いに対しては僅かな間まがあった。

「そうね」

なんでもないような、笑顔。夫人は今、何かを意識した。そんなふうに見えた。

何はともあれ、侯爵の寢室に入る機会を得たわけだ。接点と言えるかどうかも分からない、小さな接点だけど、胸は躍る。

なんだろう、この感覚。もしかしたら、楽しいかも知れない。手の届かない存在に、少し近付けた。それだけのことが、なんだか楽しい。ラン＝シー・デュミールを追い掛けて、捕まえない。そんな衝動に駆られた。

難攻不落の城塞を落とせたら、楽しいに決まってる！ そういう楽しさだ、きっと。

四階の西側。螺旋階段の近くに、侯爵の寢室はあった。半分に減ったとは言え、それでも多い花束を、いったん左腕で抱えて、扉を叩く。返事がないことは分かっていたけど、少し待った。

「御存じかしら？ ここは旦那様の寢室よ」

見れば、赤毛の女性がボクを睨み付けている。いや、普通に見て

いるだけかも知れないけど、視線が怖いし、言い方も嫌みっぽい感じがする。

ちよつと目尻が釣り上がった感じの美人　名前は確か、アルウイリア。

「それが何か？」

「ここはあなたのような人間ひとが来る場所ではないわ」

「でも、奥様の言い付けですので」

「私が代わって差し上げるわ。その花を寄越しなさい」

アルウイリアが手を伸ばすから、ボクは咄嗟に身を捻った。誰が渡すもんか！

ところが、アルウイリアは簡単には引き下がらなかった。花束を抱えているボクの左腕を掴むと、細腕には似つかわしくないほどの力で引つ張ったんだ！

それをボクが振りほどこうとしたものだから　しまった、という思いも虚しく、ボクの手から溢れた花束は、次の瞬間には辺り一面に飛び散っていた。

それを見て、ボクは呆然と立ち尽くすしかなかった。頭の中が真っ白になって、しばらくは何も考えられなかった。

「あなたが悪いのよ、逃げたりするから」

アルウィリアは平然とボクを見据えている。自分が花を踏んでいることにさえ気付かない様子で。

切なかった。それ以外には何も浮かばなかった。彼女に対する怒りよりも、別の何かが大きくて、言葉にならなかった。

ボクは、力なく俯いていた。唇を噛む、その小さな痛みが、心の痛みを消してくれるような気がした。

「綺麗に片付けておきなさい」

それだけを言い残し、アルウィリアは足早に去っていった。まだ生きている花をも踏み越えて。

ボクは、崩れるように跪ひざまずいた。飛び散った花を片付けるわけでもなく、ただ呆然と眺めていた。

どれくらいそうしていたのか、傍らの気配に気付いて顔を上げると、そこには執事のジルラーが立っていた。

下から見上げることによって、逞しい胸回りが際立って映る。ちよつと怖い感じの顔も。

「これはまた派手に散らかしたものだな」

慰めるわけではなく、咎め立てするわけでもない、淡々とした口調だった。

「申し訳ありません」

今のボクは謝るだけで精一杯だった。他に言葉は浮かんでこなかった。

「私に謝るようなことか？」

優しくもないジルラーの言葉を聞いて、何故か涙が込み上げてくる。冷静に考えて、泣くようなことでもないのに。

「おい、こんな失敗くらいで泣くのか？ もう少し心根しんねの強い娘だと思ったが、私を失望させないでくれ」

それは、閃光が走ったような瞬間だった。淀んだ闇を漂っていたボクの前に、眩しい光が射したんだ。

ボクが普通ただの召使いで、大きな失態を演じたのなら泣きもしよう。でも、召使いは仮の姿。本当は侯爵を狙う刺客なんだ。人前では、「気丈な娘」を演じていればいい。

ボクは指先で目尻の涙を拭くと、柔らかく微笑んでみせた。露骨な作り笑いだけど、それが却ってジルラーには効くかも知れないし。

「顔に合わず、お優しいですね」

復活。ちゃんと言葉も出る。

「冗談は止せ。これでも使用人には厳しいので有名なんだ」

「そのような仰有りよう、私にだけ優しくしてくださいさるのかと勘違いしてしまいますわ」

ジルラーを見上げたまま、にっこりと微笑む。彼には情けないところを見られてしまったのだから、少しは困らせてやらないと。

でも、ボクの意に反して、ジルラーは余裕たっぷりの構えだ。困っている様子など全くなく、それどころか逆にボクの頭を優しく撫でてくれたんだ！

「その元気なら大丈夫だな」

まるつきり子供の扱いだ。

嘘でしょ。どうしてジルラーが優しいの？ あんな怖い顔なのに。自分でも、「使用人には厳しい」って言ってたのに。

ジルラーの言葉で元気を取り戻せた。それは事実だから、一応、感謝はしておくかな。絶対に言わないけどね！

散らばった花を片付けて、夫人の部屋に戻ったときには、既に情報が伝わっているようだった。邸内で失態を演じれば、それを隠しておくことは出来ない。あつという間に周知の事実となってしまう。

咎められることを覚悟で、ボクは夫人に謝った。敢えてアルウィリアの名前は出さずに。彼女を庇ったわけではなく、他人の所為にすると却って印象を悪くしてしまうから。

「そんな悲しい顔をなさらないで。散ってしまったお花も、決してあなたのことを恨んではいないでしょう」

夫人が、ボクの肩にそつと手を置く。優しい手だ。そして、優しい微笑みだ。

叱られても仕方がない状況で、反対に慰められてしまい、ボクは戸惑った。

くすぐりたい。でも、居心地は悪くない。そんな感覚だった。

接近

屋敷の間取りは殆ど覚えた。人の動きも少しずつ見えてきた。

クラリーニアは相変わらず親切だ。夫人はボクを可愛がってください。

目立つ動きをした代償として、何人かの召使いには嫌われてしまったらしい。その中でも特に、アルウィリアは行動が直接的だ。すぐ睨むし、擦れ違えば肘鉄を食らう。子供っぽい嫌がらせを次々と繰り広げてくるんだ。尤も、相手^{ボク}を傷付けようとするなら、もっと効果的な手段があるはずだし、この程度で済んでいる、と考えた方が良さそうだ。

問題は、デュミール侯爵だ。お見送りと、お出迎え、ちゃんとしてるんだけど、まだ顔を覚えてもらってないのかな？

このまま、ずっと見向きもされなかつたら、と思うと、切なくなる。

ねえ、ボクを見て。ボクの視線に気付いて。ボクを、ひとりの人間として認めて。ラン＝シー・デュミール。ボクと恋に落ちてなんて言わないから、せめてボク^{ボク}の存在を知って。

その祈りが通じたのか、ボクは侯爵と言葉を交わす機会を得た！

夫人の部屋で、ブランドンと遊んでいたときのことだった。何の前触れもなく、侯爵が夫人の部屋を訪れたんだ。それも真つ昼間から。

あまりに突然の来訪だったから、心の準備も出来ていなくて、まじまじと侯爵を見つめてしまった。背、高いなあ。ボクと頭ひとつ分は違う。

「其方は確か……」

「ミコトです」

「ああ、ジルラーから聞いている。セライスタの我儘を聞いてくれているそうだな」

「奥様は我儘など仰有らない方です。私のような者にさえ、お優しくて」

ボクとしては、別に誇張して言っただつもりはなかった。でも侯爵は、何か言いたげな薄い笑みを浮かべて、楽しみに夫人を見遣った。

「結構なことだ」

妙な反応だ。まるで、いつもは違うとも言いたげな。

「紅茶をお持ちします」

「私には構わないで、其方は猫とでも遊んでいなさい」

そう言つと、侯爵はボクの横を通り過ぎていった。

夫人は、と言つと、そんな侯爵には見向きもせず、黙々と本を読んでいる。黒檀の円卓には、さっきボクが淹れたばかりの紅茶。手

を伸ばした。来訪者に気付いてないかのよう。

侯爵が側まで来ると、夫人はようやく顔を上げた。

「御用は何ですか？」

無表情。ふんわりとした優しい笑顔が印象的だから、夫人の冷やかな態度にはボクが戸惑った。侯爵は、それほどでもないみたいだけ。

「妻の部屋を訪れるのにも用が要るのか？」

「いいえ。毎夜でもお越しくださいませ」

どうも棘のある言い方だ。夫人は、侯爵に不満を抱いているのかなー？

そう言えば、夫人は最初から、ボクのこと侯爵の愛人じゃないかと疑っていたし。もしかして、夫人がボクを可愛がってくたださるの、侯爵に近付けたくないから。なんて、うぬぼれもいいところだ。

「皮肉を言うな」

「皮肉とお思い？ わたくしは、ささやかな望みを口にしたただけすわ」

単純に考えれば、なかなか相手をしてくれない侯爵に対して、夫人が拗ねている、という構図になるけど。

侯爵つて昼間は屋敷を空けていることが多いし、夫人のこと、ほ
つたらかしにしてるんじゃない？

それで、たまに部屋を訪ねたりすると、口喧嘩に発展する　み
たいな？

まあ、それほど険悪な雰囲気でもないし、ボクとしては見過ごせ
る範囲だ。

それよりも、侯爵、ボクの名前を覚えてくれたかな？

ボクの獲物　ランシー・デュミール様。ボクの名前を呼んで
その瞳の檻にボクを閉じ込めて。

不和

遂に訪れた。侯爵と二人きりになる、またとない絶好の機会が！

と言つても、これがちつとも艶っぽい話じゃないんだ。話を持ってきたのがジルラーだっただけに、初めから期待なんかしてなかったけど。

ジルラーが、「語学には堪能か？」と訊くから、ボクは「リュノックの言葉なら総て人並みには」と胸を張った。

リュノック連合王国では、大きく分けて四つの言語が使われている。リュノック語、堯矛語ギョームの他に、エダム地方の言語とアーザルマ神聖語だ。ちなみに、アーザルマ神聖語は古代の神聖王国を発祥としているけど、今は俗語とも混じって、かつての美しい響きを殆ど残していない。思うに、リュノックでいちばん変な言語だ。

「古語は読めるか？」

「はい」

何しろ厳しい教育係だったから、語学に関しては徹底的に仕込まれたんだ。それが今に生きてくるなんて、思いもしなかった。

ボクが仰せ付かったのは侯爵の手伝いだ。朝から書庫に籠もりきりの侯爵を手伝って、本の整理をすること。簡単そうな仕事だけど、色気はないよね。

ひとまず今日は下調べ。侯爵の背後に立って、隙があるかどうか

見極めてやる！

そんなわけでボクは、いつもの倍くらい意気揚々と、分厚い書庫の扉を叩いた。返事はなかったけど、鍵は開いていたし、早く侯爵に会いたいという思いもあって、中に入ることにした。

初めて踏み入れた書庫は、想像していたよりも凄いものだった。天井まで届きそうな本棚が壁のように聳え立っていて、右から左から圧迫感を覚える。ざっと見た感じ、王立図書館さながらの蔵書数だ。

侯爵の背中を発見！ 周囲には山積みの本が雑然と並んでいる。手に持った本をパラパラと捲っては脇に避け、新しい本を手取るという作業。そんな何気ない仕種でさえ優美だ。

逸る気持ちを抑えつつ、ボクはゆっくりと足を進めた。

「旦那様」

背後から声を掛けて、ボクは「あれ？」と思った。今だったら容易に殺れそうな気がしたんだ。

足を忍ばせてるわけでもないのに、まるでボクが存在に気付いていないような感じだった。もし今、懐剣を持っていたら、思わず抜き放っていたかも。

声に反応して、侯爵の手が止まる。

「其方、ここへ何しに来た？」

振り向いてくれないばかりか、拒絶とも取れる言葉。頼まれたから来たのに、それはないでしょ。と言いたいところだけど、

「旦那様のお手伝いに」

「其方に出来るのか？」

言いつつ、ボクを見遣る。まるつきり信用していない感じた。

こうなったら意地でも役立つてやる。そして彼に分からせてやるんだ、ボクが如何に有能な召使いかを。

ボクの働きを見れば、嫌でも側に置きたいって言い出すはずだ。

「何なりとお申し付けくださいませ」

「では、そっちの棚から国別及び種類別に分類してもらえるか？」

そう言っつて侯爵が指差したのは、取り分け大きな棚だった。本の数は百や二百じゃない。これをボクひとりで分類しろって？ この侯爵様は何を考えてんだか。

「ひとつお訊きしても宜しいでしょうか？」

「手短かに頼む」

「このような雑事など、初めから私ども使用人にお任せくださいませ
したら」

「其方は頭が良いのか悪いのか。ジルラーでさえ読めぬような文字

を、飯炊き女が読めると思うのか？」

この侯爵様って、口が悪い。気取らない喋り方は好感が持てるけど、いちいち人を小馬鹿にしたような物言いをするんだもん。

夫人の前では凄く優しくそんな感じだったけど、二人になると途端に冷たくなるなんて、性格が悪いとしか思えない。

顔はいいのに。家柄もいいのに。権力もあるのに。性格だけが悪い。

しかも、ボクの魅力には気付いてくれないみたいだし。古びた本にしか興味ないなんて、頭おかしんじゃない？

「言い忘れていたが、暁矛に関する物は出来るだけ下の段に入れてくれ」

また妙なことを言う。どうして堯矛だけ？

訊いても教えてくれないだろうし、詮索すれば不審に思われるかも知れないから、素直に従うけどさ。従うけど いったん作業を始めたなら、ひとことも口を利いてくれないんだもん。ボクも、黙々と分類の作業を続けるしかなかった。

分類していて、ひとつ気付いたことがある。堯矛に関する書物が異様に多いんだ。

リユノック連合王国の中にあつては最小の、取るに足りない国ではなく、重要国の扱いだ。ボクにとっては故国だし、魅力ある土地だけど、名門デュミール家の当主が、どうして執着するんだろ

う？ デュミール家の所領^{とち}が暁矛と隣接していることと何か関係があるのかな？

「ミコト」

不意に下から声がして、ボクは慌てた。そのときボクは、棚の最上段に本を納めようとして、梯子に登っていたんだ。下から声を掛けるの、やめて欲しい。

「はい」

もしかして休憩？ そんな期待を抱き^{いだ}ながらの返事だ。

「そんな高いところに登ると」

侯爵様でも心配してくれるんだ と思ったのに、言うに事欠いて、「中が見えてしまうぞ」って！

焦ったボクは、思わず裾を押さえてしまった。その瞬間バランスを崩し、身体が大きく傾いた！

左手には本。梯子を掴めない。落ちる！

落ちた。ただし、デュミール侯爵の腕の中に。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。受け止めてもらえなくても思っ^ててなかった。

事実。何処も痛くない。侯爵の顔が間近にある。

主観。彫像のように端正な顔立ちだ。

予感。このまま惚れちゃいそうな。

そして彼は、ボクを抱いたままで言う。

「済まぬ、戯れだ」

瞬間、ドキツとした。ほんの少し、彼の口許が綻んだように見え
たから。その笑みは、ボクに向けられたと思っ
ていいの？

見つめられていると思うと、どうしようもなく胸が高鳴る。胸を
押さえて「静まれ！」って言いたいくらいに。

「立てるか？」

ゆっくりと降ろされて、地面に足が触れたけど、力が入らなくて
ボクは座り込んでしまった。そんなボクを支えるように、麗しの侯
爵様が肩を抱いてくれる。

「怖い思いをさせたな」

思いの外、彼は優しくかった。責任を感じてのことだろうけど、ど
んな形であってもボクは嬉しかった。その力強い腕に抱かれている
という事実だけで、満たされていた。

この瞬間が永遠ずっとに続けばいいのに。そんなボクの願いも虚しく、
二人だけの時間は不意の来訪者によって奪われてしまった。

侯爵夫人セライスタ

最も見られたくない人物に、どうやら今

の場面だけを見られてしまったようだ。

「それは何の真似ですの？」

夫人でなくても、今のボクたちを見れば誤解するかも知れない。ましてや、夫人はボクと侯爵の仲を疑っている節がある。

顔にこそ出さないけど、ボクは焦っていた。だって、夫人の前だというのに、侯爵はボクの肩を抱いたままで、ちっとも離してくれないんだもん。しかも夫人に向かって言った台詞が、これ。

「其方を呼んだ覚えはないが？」

ああ、もう、どうして夫人の気持ちを無視するような言い方をするのかなー？

「わたくしはミコトに用があつたのです。ブランドンの世話を頼みに来ましたの」

夫人は明らかに怒り顔だ。良家の出にしては喜怒哀楽が激しすぎるような気もするけど、それが魅力的でもある。少なくとも、ボクは嫌いじゃないな。

「済まないが、もう少しの間、ミコトを私に預けてくれないか？
まだ片付いていないのだよ」

だから、そうじゃなくて、誤解を解くのが先でしょ！

どうして夫人の気持ちを察してやれないの？

「勝手になさいませ！ ミコトはあなたに差し上げます！」

夫人は、苛立ちも露わに言い放つと、もう、その場に足を留めてはいなかった。足早に去っていく後ろ姿が寂しげで、見ているボクが泣きそうになる。

ボクが、夫人に代わって恨み言のひとつでも言っただろうかと思っただけ、やめた。侯爵も、平然としているわけではなかったから。自分が何を言っただかは分かっている。そんな顔だった。

言われたとおり、ひとつの本棚の整理を終えると、ようやく息苦しい書庫からも解放された。夫人が去ってからは気まずくて。しかもボクは、夫人のことばかりを考えていたから、気が急いで作業に集中できなかつた。それも、みんな侯爵が悪いんだ！

すっかりしないまま書庫から出ると、不幸にも今度はアルウィリアと出くわしてしまった。

「あなた、そこで何をしていたの？」

問いただすような口調。ボクが、悪いことをしていたみたいなの。

「仕事です」

「うそ仰有い。私たちは書庫には入れないはずよ」

「そうでしたの？ 私はジルラー様から仰せ付いただけですから」

許可がなければ立ち入れない場所だとは聞いていた。ジルラーから。でも、気が立っていたボクは、つい挑発的に切り返してしまった。今は、お喋りしてる場合じゃないんだって！

「あなた、ジルラー様に鼻肩されているようだけど、どんな手を使っ
つて取り入ったのかしら？ 興味があるわね。私にも教えてくださ
らない？」

フフンと鼻で笑う感じ。彼女もボクのことを誤解してる。しかも嬉しくない方向に。

ボクがジルラーに鼻肩されてるって？ 本当にそうなら、理由を知りたいのはボクだ。

それに、どうせ誤解するなら、相手は侯爵様にして！

「御想像にお任せしますわ」

「あら、認めるの？」

アルウィリアは意外そうな顔をした。

何を言っても信じてもらえないだろうし、言い訳するだけ時間の無駄というものだ。

「失礼いたします」

表情を殺した会釈。ボクはアルウィリアの脇を通り抜け、その場を去った。

もしかしたら、口論することも彼女との間には必要だったのかも知れない。でも、今のボクには、そんな余裕はなかった。

一刻も早く、夫人の誤解を解いておきたかったから。そうしないと、ボクの立場が危うくなるし、気分も悪い。だって、気分の問題でしょ。気分さえ良ければ、どんな冷遇を受けたとしても乗り越えられるけど、逆に気分が悪かったら、どんな幸せも逃げてしまう。

正念場　　かも知れない。夫人に嫌われたら、おしまいだ。

どう言い訳をすればいいか考えがまとまらないまま、ボクは夫人の部屋を訪ねた。

「奥様」

本を読んでいる夫人を、ボクが見下ろす格好だ。ボクが近付いても、夫人は視線を上げてくれない。

「何？」

落ち着いているようには見えるけど、ボクを全く見てくれないし、冷やかな印象さえ受ける。不機嫌は明らかだ。

「奥様は誤解なさっています」

「あら、どんな誤解かしら？」

夫人は、本に視線を落とすままだ。どうしてもボクを見てくれないの？　ボクは、もう嫌われてしまったの？

窓から吹き込む優しくない風が、軽く波打つ長い金髪を、乱暴に掻き乱す。それにも彼女は苛立っているようだった。

「それは」

「良いのです。あなたとランシー様が逢瀬を交わすような間柄であつても、咎め立てする気はありません」

ほらほら、やっぱり誤解してる。この先どうなるかは分からないけど、今は全然そういうことはないのに。

夫人が立ち上がった。何をするのかと思えば、植物の水やりだ。普段なら、そういう雑用はボクの仕事なのに。

「ですから、それは誤解なのです。あのときは、私の不注意と申しましょうか、梯子はしから落ちてしまい、それを旦那様に助けていただいたのです」

ボクの不注意と言うよりは、侯爵様の「戯れ」だ。

「言い訳なんて、なさらないで」

夫人は、染め付けが可愛い磁器の水差しで、植物に水をやりながら、部屋の隅ばかりを回っている。ボクの顔を見ようともしない。拒絶　されてる？

あ、あんなに水をやったら根が腐る。いや、そんなことよりも今は奥様だ。

「言い訳だなんて」

どう言い繕おうか困って、言い淀む。事実を述べたところで、ボクの言葉を夫人が信じなければ同じだ。

「あなたが代わりに子を産んでくださるといふのなら、わたくしはデユミール家の嫡子として可愛がります。わたくしが認めているのですから、あなたには何の不满もありませんわ」

それ、本心なの？

本当にそう思っているなら、どうしてボクを見てくれないの？

「奥様」

ボクが呼び掛けても、夫人は返事をしてくれなかった。仕方なく、ボクは部屋を出ることにした。夫人を、いつまでも部屋の片隅に立たせておくわけにはいかないから。

月下

「どうだ、上手くやっているか？」

それは、ボクの行動を見透かしているかのような一言だった。グイド・ジルラー。

夫人の不機嫌くらいは伝わっているとしても、書庫での出来事までは知らないはずなのに。上手くやっているか、だって？ やつてないよ、全然！

夫人は相変わらずボクと侯爵様との仲を疑っているし、どういふふうに噂が伝わっているか分からないけど、他の召使いたちの視線が痛いし。ちよつとでも夫人の機嫌が悪かったりすると、全部ボクの所為みたいになってるし。クラーニアまで「ちゃんと奥様に謝った？」なんて訊いてくるし。

肩身が狭いなんてもんじゃない！

「その様子では、あまり上手く立ち回っていないようだな」

「どうしてお分かりになるのです？」

「顔に書いてある」

そんなはずはない。ボクは、いつもと変わりなく振る舞っている。

ほら、今だって余裕の微笑みだ。大丈夫。表情を読まれたりはしていない。ジルラーは、ボクを試しているだけなんだ。

ボクの正体も、見破られたりはしない。疑われるような行動は取っていないはずだから、たぶん大丈夫だとは思うけど、その鋭い眼差しに射貫かれると、何もかも見透かされているような気分になる。どうしよう、やっぱり苦手だ。

「そうやって」

ジルラーが個人的にボクを呼び止めるだけでも、傍はたから見れば、依怙えいひいき鼻肩だ。どういつつもりでジルラーがボクを構うのか知らないけど、ほっというて欲しい！

ぼむ。擦れ違いざまに、軽く頭を叩かれた。あれ？

何が起こったのか理解できないまま、遠ざかる足音だけを聞いていた。笑い声が聞こえてきそうな、乾いた足音だった。

ジルラーが、ボクの頭を、叩なでいた。なんで？

ボクの努力が報われたのか、はたまたジルラーの「ぼむ」が効いたのか、その晩またしても、侯爵様と二人きりになる機会を得た！

ボクは、こっそりと庭に出て、十六夜の月を眺めていた。暁あけ矛こにいた頃は、よくユヒラお姉様とお月見をしていたからね。ボクが豎琴を弾き、お姉様が笛を吹く。ボクが歌い、お姉様が舞う。そんな夜を、ボクは思い出していた。ちよつと感傷的に。

僅かに欠けた月は、物思うには優しい光だ。

池の畔に建てられた東屋で、ぼんやりとしていたら、草を踏む音が近付いてきた。

「おや、先客か」

「ラン＝シー様！」

僥倖^{じやうじやう}、と言える瞬間だった。

月明かりに照らされた彼は、息を呑むほど素敵で、ボクは見惚れた。

ボクの騎士。そんな言葉が頭の片隅をよぎる。彼がボクの騎士なら、どんなに素敵だろうか。

「ここは私だけの穴場だったのだが」

いつになく柔らかな表情を見せ、侯爵が近寄ってきた。

誰が見ても特等席だと思っんですけど、穴場？

「申し訳ありません」

ボクは召使いで、相手は侯爵様。さすがに同席は不味いから、ボクは立ち去ることにした。名残惜しいけど。

「構わないから、ここにいなさい。折角の月夜なのだから」

立ち上がるうとしたボクを制して、侯爵も腰を降ろす。ちょうど

向かい側の席に。

今宵の侯爵様は、優しそうな顔をしている。その眼差しの先には、紛れもなくボク。月ではなく、ボクを見つめているの？

瞳に囚われることが、こんなにも甘美だなんて。

どうしよう、侯爵様しか見えない。瞬きすら、忘れてしまう。

早く目を逸らさないと、まばゆい光に焼き尽くされてしまう！

月だ。月の優しい光で、瞳を洗えばいい。ボクは、頭の中で必死に命令した。月を、見るんだ。

ボクは、未練を断ち切るようにして、目を逸らした。

「月が恋敵では、とても私の敵う相手ではないな」

ちょっと、何を言い出すの、もう！

ドキツとした、なんてもんじゃない。思わず、また彼の方を見てしまった。もう、やられた。

鼓動が早い。顔も熱い。月明かりくらいでは分からないと思うけど、顔が赤くなっていると思う。ほら、ボクって色白だから、そういうの目立つちゃって。

「旦那様」

「ラン＝シーで良い」

「はい、ラン＝シー様。今は、もしかしたら戯れでしょうか？」
恐る恐るという感じで訊いてみた。真意を確かめるのは、ちょっと怖い。でも、聞き流せない言葉だから。

優しい微笑み　ではなく、苦笑い？　やっぱり「戯れ」だ！

「そう聞こえたか？」

「はい」

「では、そうしておこう」

侯爵　ううん、ラン＝シー様と呼ぼう。そのラン＝シー様の顔から笑みが消えた。

もしかして、受け答えを間違えた？　もっと甘えても良かったの？

ラン＝シー様という人が、いまいち掴めない。ボクのこと、少しは気に掛けてくれているような気はするけど、たまたま近くにいるから、という程度のことかも知れないし。

さっきまでの甘い雰囲気は何処へ行ったのか、ラン＝シー様は、もうボクを見てはいなかった。月が、ボクの恋敵だ。

仕方がないから、ボクも月を見る。それ以外にどうすればいいって言うの？

いつまでもラン＝シー様を見つめているわけにもいかないし、席

を立つなんて失礼だし、ボクから話し掛けるなんて、そんなこと出来るわけもないし。

沈黙。これがボクには苦痛だった。でも、慣れてくると、静かな時間も悪くない、と思えるようになってきた。

月明かりと、虫の鳴き声。そして、手を伸ばせば届くところに。

「少し歩かぬか？」

ラン＝シー様が、ボクを見ていた。何を考えているか分からない、不思議な瞳で。

ボクは微笑みを湛え、こう答える。

「はい」

ラン＝シー様がボクを特別に思っているかどうかは分からないけど、少なくともボクは特別な時間を過ごしている。それで今は充分だ。

ラン＝シー様が東屋を出て、ボクもそれに続いた。

星が降る。手を伸ばせば、数百の星くらいは掴み取れそうな、溢れんばかりの星空だ。

少し前に行くラン＝シー様の、影を踏んでみる。背中。隙だらけだった。

もし今、懐剣を持っていたら、急所を突くことも可能に思えた。どうして、こつも無防備なの？

リユノック屈指の勇将と言われていているようだけど、どうも信じられない。隙は、ある。

試しに、手を伸ばしてみた。ほら、触れられる。と思ったら、ラン⇨シー様が立ち止まった。あわわ。ボク、何やってんだろ。

振り向いたラン⇨シー様が、ボクの手を握る。大きくて、力強い手だ。引つ張られた。手を繋ぐ形でラン⇨シー様が歩き出したから、ボクも従うしかなかった。でも、その強引さが嬉しかったりする。

たぶん、舞い上がっていたんだと思う。状況が全く見えていなかった。

「私から離れるな」

ラン⇨シー様の緊迫した声が、ボクを現実に引き戻した。誰か、いる。

背中を撫でられるような、気色が悪い気配。殺意に満ちた風が、背後から吹き抜けた。

ラン⇨シー様が早足になった。ボクも合わせる。

まさか、ラン⇨シー様を狙う刺客？ でも、どうして？ ボク以外にもラン⇨シー様を狙っている人間がいるの？

ラン⇨シー様が横に動いた。次の瞬間、風を切り裂く音がした。

たぶん、矢だ。

繋いだ手から何か伝わってきて、ボクも少しは反応できたから、
転ばずに済んだ。

「ラン〓シー様」

呼んでみた。名を、呼んでみたかった。

「心配は要らない。其方は私が守る。走れるか？」

「はい」

裾が邪魔にならないように、左手で持ち上げる。右手は、ラン〓
シー様の左手と繋がっている。駆け出した。

こんなときだけど、わくわくしてる。相手がラン〓シー様だから？

ボクが暢気なことを考えている間にも、追っ手が迫ってくる。ボ
クの足が遅いからだ。

ラン〓シー様がボクを守ってくれるなら、ボクもラン〓シー様を
守る。ラン〓様はボクの獲物なんだから、横取りされるわけにはい
かない！

それに、ここで彼に死なれたら、ボクの命もないと思う。

ボクは、信じることをためらわなかった。ボクを導く大きな手が、
決して裏切ることはないと素直に信じられた。信じて、走った。月
明かりに照らされた、幻想的な道を。

池に架けられた細い橋に差し掛かったところで、ランシー様が速度を緩めた。どうやら迎え撃つ場所を決めたらしい。足手まといになるボクを背後に隠せば、心置きなく戦える、ということかな。たとえ素手でも、一対一の戦いなら絶対に負けない、という自信もあるんだと思う。見えてない矢が交わせるくらいだから、見えていれば手で掴み取れるんじゃない？

ボクも、小太刀の腕には自信があるけど、そんな領域には踏み込めなかった。せいぜい飛礫つぶてを交わすとか、その程度だ。

刺客が追い付いてきた。思わず振り返ったボクを、ランシー様が引つ張った。

「もう少しだ」

橋の真ん中まで来たところで、ランシー様の足が止まった。二人で振り向くと、刺客はすぐ近くまで迫っていた。

「おやおや、逃げるのはもうおしまいかい」

左手に弩を持った男が、短めの剣を抜き放った。

素手のランシー様は、どう見ても不利。それでもランシー様は、ボクを庇うようにして前に出た。

「心配ない。すぐ終わる」

「へえ、そりゃいい。聞いたか、相棒！」

相棒？　ボクは咄嗟に振り向いた。新手。いた。

強すぎる殺気が、もうひとつの気配を隠していたんだ。

「ラン＝シー様」

演技なんかじゃない、本物の不安が、口を突いて出た。

「案ずるな。其方だけは守る」

ラン＝シー様の力強くも穏やかな声が、ボクを勇気付ける。

でも、ボクは聞き逃さなかった。ラン＝シー様は、「其方だけは」
って言った。それ、どういう意味？

こうしている間にも、もうひとりの刺客がじりじりと詰め寄って
くる。迷っている暇はない。どうする？

周りは水。池に飛び込めば、ボクだけは助かるかも知れない。で
も、それはラン＝シー様が食い止めてくれることが前提だ。そうな
ったとき、ラン＝シー様が助かる可能性は限りなく低い。ダメだ。
他の作戦を考えよう。

せめて、相手がひとりなら。

そうだ。ひとりに減らしてやればいいんだ。

ここで手柄を奪われるくらいなら、一か八か勝負を懸けてみる。
ちよっと危ない橋だけど、渡ってみせようじゃないの。

勝機は、相手の油断だ。

「ラン＝シー様。これから何が起ころうと、目の前の敵に集中なさってください。決して振り向かないで」

背中合わせのラン＝シー様に、ボクは囁いた。

本当は、抱き付いて感触を確かめたかった。でもそれは、次の機会に取っておく。

ミコト。微かに聞こえた。ボクの名を呼ぶ声が。

ボクは駆け出した。もうひとりの刺客に向かって。

先に現れた濁声の刺客とは対照的に、不気味な静寂を纏う男だった。こつちの方が、怖い。相手を間違えたかも知れない、という思いが脳裏を掠めたけど、もう遅い。ボクは、なるべく取り乱した振りをして、男の前に駆け寄った。

「お願い、命ばかりは」

これは賭けだ。相手の油断を誘うために、わざと隙を見せる。斬られる危険性ははらんでいるけど、奴が、一瞬でもボクを利用したと考えると、勝機は生まれる。リュノック屈指の勇将と謳われるデュミール侯爵の腕前を知っていれば、ボクを人質として利用したくなるはずだ。そういう読み。

さあ早く、今のうちに動いて。ボクは、祈る思いでラン＝シー様を見遣った。隙も作った。斬り掛かられたら、たぶん今のボクには交わせない。

必殺の間合い。遣り過ぎした。強靱な腕が、ボクを襲う。ボクは、左手一本で締め付けられてしまった。つまり、斬られなかった、ということだ。思った以上に力が強いけど、幸いにも剣は突き付けられていない。ボクの力を侮っている証拠だ。

「いや！ 離して！」

演技。どれくらい動けるか、ちよつと暴れてみる。

「大人しくしろ。黙らねば殺す」

はい。大人しくします。だから殺さないで。お願い。なんてボクが言つと思つ？

届いた。ボクは男の右手を押さえると、力任せに剣を振り下ろさせた。脚を狙つて。

命中。この隙を突く。ボクは、男を巻き込む形で池に倒れ込もうとした。

男も踏ん張つたけど、ボクの頭突きが顎に命中すると、さすがに仰け反つた。池だ。男と絡み合つたまま、ボクも落ちる。

「ミコトー！」

沈む前に、ラン＝シー様の声を聞いた。

ボクの身を案じてくれるのは嬉しいけど、その前にやる必要があるでしょう。こっちは何もかも作戦どおりなんだから。

予定では、水中で男を振り払って脱出するはずだった。池に飛び込むつもりだったボクと違って、相手は息が保たないはずだから、すぐに水面から顔を出そうとするだろうと考えた。ところが、男はボクを放そうとはせず、尚も締め付けてくる。逃れられないなら、敢えて抵抗はしない。藻掻けば、先に息が切れる。こうなったら持久戦だ。

沈みながらも、ボクは冷静だった。上では、ラン＝シー様が刺客を片付けた頃だろう。ボクのことなど気にしなければ、ラン＝シー様なら勝てるはずだ。

池は、意外と深かった。上から見た池には月が落ちていたけど、水の中は真っ暗で、もう、どっちが上かも分からなくなっていた。

死ぬ、かも知れない。もし、ボクが死んだら、ラン＝シー様は悲しんでくれるのかな？

ううん。悲しんでくれなくていい。生きて、また笑顔が見たい。生きる。絶対に。

ボクは、最後の抵抗を試みた。

羞恥

日だまりの揺りかご。羽毛を敷き詰めた柔らかい寢床で、雛鳥のように眠る。大きな翼よくに抱いだかれて。

目覚め。その瞬間に、夢を見ていたことを知る。

夢の余韻を残しながら、うつすらと目を開けると、そこには見慣れぬ天井があった。

ひとことと言えば豪華。視界に入る総てが、上質感に溢れていた。

記憶の糸が繋がらない。釈然としない目覚めだ。ここは、何処？

そうだ。確か、ラン⇨シー様と月夜の散歩をしていたら、刺客に襲われたんだ。そのときボクは刺客のひとりと池に落ちて……それからどうなったんだっけ？

いや、それどころじゃない重大な事実気付いた。

どういうわけか、ボクの隣にラン⇨シー様が寝てるんだ！

ということは、ここはラン⇨シー様の寝室？

「ミコト」

ボクの目覚めに気付いたラン⇨シー様が、半分ほど上体を起こした。ボクを覗き込むような感じで、柔らかい表情を作る。

「気分はどうだ？」

労るような低い声が、ボクを更なる覚醒へと導く。慌てて飛び起きたボクは、このとき自分が何も着ていないことに気付いた。露になった胸を、薄手の掛け布団で隠したけど、もう手遅れだよな？

状況を整理しよう。ボクは刺客と池に落ちた。ボクは服を着ていない。服を脱いだ記憶はない。つまり、脱がされたことになる。当然ラン⇨シー様はボクの裸を見た。ラン⇨シー様はボクが女ではないことに気付いてしまった。

だんだん状況が飲み込めてきて、ボクは愕然とした。任務失敗だ。

「濡れた服を脱がせたつもりだったが」

ボクが男だと分かって、驚いた？

ああ、もう、恥ずかしくてラン⇨シー様の顔が見られない！

手遅れだと分かかっていても胸を隠し、俯いた。結わいてない髪が、幸いにも視界を狭めてくれる。

「誓って、私は何もしていない」

いや、そういうことじゃないでしょ。ラン⇨シー様、何か勘違いしていらっしやる？

気遣いは嬉しいけど、この場合、もっと別な言い方があるんじゃない？

ボクが恥じらう理由は、本当の姿を見られてしまったからで、ラン⇨シー様にイケナイコトされたなんて全く思ってませんから。

「其方が無事で、本当に良かった」

ラン⇨シー様の手がボクの肩に触れる。優しく。

ラン⇨シー様の吐息を、耳許で感じた。顔が、近くない？

近い。ラン⇨シー様ってば、近い！

肩に添えられていた手に、やや強い力を感じた、と思ったら、もう抱き寄せられていた。

不覚にも、ボクはラン⇨シー様の胸に顔を埋めることになる。顔を見られなくて済むけど、この格好は別の意味で恥ずかしかったりする。恥ずかしいから、もう甘えちゃえ。ボクは、肩の力を抜いた。触れている部分から、優しさで、それ以上の何かが伝わってくる。このままボクを、もう少しだけ勘違いさせて。夢から覚めるまで。

覚めた！ 扉を叩く音に、目を覚まさせられた。

「旦那様、お目覚めの時刻にございます」

扉の向こうから、若い男の声がした。

うわ、どつしよ。こんなところを見られたら、誤解されちゃう！

布団に潜って遣り過ごそうか、それとも別の場所に隠れようか。

いや、ボクは裸だ。色んな意味で、不味い。ボクが慌てふためいてると、ラン＝シー様が耳許で囁いた。

「いいから」

何が、いいから？　ちつとも良くないんですけど？

ボクが嫌がる素振りを見せても、ラン＝シー様は放してくれない。また「戯れ」かと思つたら、そんな様子でもなかった。要するに、ラン＝シー様の「いいから」は、「気にしていない」という意味だから、ボクが気にするんだつてば！

結局、ボクはラン＝シー様の腕の中で、若い厨夫を迎えることになる。紅茶を運んできた厨夫が、ボクを見て　ああ、やっぱり変な顔をしている。いや、顔には出していないようだけど、目が語っている。あんまり、じろじろ見ないでくれる？

「もうひとつ、カップをお持ちいたしましょうか？」

「それよりジルラーを呼んでくれたまえ。至急だ」

「畏まりました」

厨夫が出ていった。

ボクは、ラン＝シー様に恨みがましい視線を送る。

どれくらい恥ずかしいか分かっていらっしやる、ラン＝シー様？

視線の意味がラン＝シー様には伝わっていないようだった。

鈍い、としか言いようがない。

そんなことよりも、ジルラーだ。呼び付けて、どうするつもりなんだろう？ にわかには不安が湧いてきた。ラン⇨シー様は、ボクをどうするつもりなんだろう？

程なくして、ジルラーが現れた。かなり不機嫌そうな顔で。

ボクは、相変わらずラン⇨シー様にくっついていてる状態だ。だって、着る物がないんだもん！

「朝早くから呼び出されたと思えば、これはまた」

寝起きが悪いのか、いつものジルラーとは違うような。喋り方が横柄だし。

ジルラーには、ラン⇨シー様が召使いと一夜を過ごした、というふうに見えているはずだから、不機嫌も分かる気がするけど。だからってボクを睨まないで！

「実を言うと、起きられん」

え？ ボクも驚いたけど、ジルラーも顔色を変えた。

「昨夜、二人組の刺客に襲われてな、不覚にも毒を受けた」

「毒を？」

「何を驚いている。おまえ、本当に朝は鈍いな。目を覚ませ。私が

毒ぐらいで死なぬのは分かっているだろう。だが二、三日は起きられんのも事実だ。特に、傷を受けた左脚が殆ど動かん。今ここで襲われたら、さすがに危ない。だから、おまえを呼んだ」

それじゃあランシー様は、溺れたボクを救い出してくれたばかりか、不自由な脚でここまで運んでくれたの？ ずっと優雅に振る舞っているから、想像も出来なかったけど。

「分かりました。では、やはり屋敷の者には気付かれない方が宜しいでしょう。表向きは、部屋に閉じこもって、研究か書の編纂などをしているように見せ掛けるのが得策だと思われます」

「それについては任せる。まだ何か言いたそうだな、ジルラー」

「いえ。何も」

「ミコトはしばらく私が預かる。協力者が必要だ」

「身の回りの世話は総てミコトに任せる、ということでは宜しいのですね？」

「それでいい。ミコトに新しい服も頼む」

「ミコトと同室のクラーニアを寄越しますが、宜しいですか？」

「そうだな、クラーニアが不審に思うよりはいいだろう」

「承知しました。そのように計らいます」

やっと、ジルラーが出ていった。身体力が抜ける。今、気付い

たけど、ずっと緊張してたんだ、ボク。ラン＝シー様という枕で、もう一眠りしたい気分だ。

「そういうわけだ、ミコト。この傷が癒えるまで、協力してくれるか？」

ボクが、ラン＝シー様のお世話を？　そういうの、嬉しいかも。じゃなくて、任務遂行の絶対好機だ！

「はい、喜んで」

答えてから、ふと思った。ラン＝シー様は、ボクが男だと分かってても、全く気にしている様子はない。それどころか、周囲には誤解させたままボクに協力を頼むなんて、何を考えてるの？

「ラン＝シー様？」

呼んでみた。遠慮がちに。

「なんだ？」

「私のこと、怪しいとはお思いにならないのですか？」

「怪しいほどに美しい」

「真面目に答えてください。理由を、お訊きにならないのですか？」

「問うて欲しいのか？」

優しい声。問い詰めるような響きはない。もし、ラン＝シー様に

厳しく問い詰められていたら、ボクは沈黙を守れなかったかも知れない。それを、心の何処かでは望んでいたようにも思う。

ボクは、小さく首を横に振った。

ラン＝シー様、その甘さが命取りです。

「ならば問うまい。そんなことよりも」

ラン＝シー様が、ボクを仰向けに横たえた。裸の上半身が、ラン＝シー様の視線に晒される。ちょっと、そういうの恥ずかしいってば！

どうしていいか分からなくて、ボクは両手で顔を隠した。また顔が赤くなっていると思う。

「そんなに無防備で、いいのか？」

大きな手が、ボクの首に触れた。官能的に。

もう、何が言いたいのか分かんないよ！

「知りません」

「ミコト」

撫でるような声がボクを辱める。もう限界だ。恥ずかしくて泣きそうになる。

それなのに

「そろそろ朝食にしようと思うのだが、其方は何が食べたい？」

その声に含まれていたのは、愉悦。また「戯れ」だ。ボクの反応を見て楽しむなんて、性格が悪すぎる！

決意

朝食前にはクラーニアが着替えを届けてくれた。のはいいけど、それをベッドの中で迎えるというわけにもいかないし、ましてや素っ裸というわけにもいかないから、思案し、ラン＝シー様の上着を拝借することにした。大きすぎる上着を、ただ羽織っただけの格好だから、ちよつと恥ずかしいけど、我慢しよう。相手はクラーニアだし。と思つたら、ラン＝シー様にも見られてるんだつた。

「ごめんなさい、変な仕事をさせてしまつて」

こんなボクを見て、クラーニアはどう思うんだろう。たぶん、不安が顔に出た。その不安をすぐさま打ち消してくれる、いつもの笑顔。むしろ、いつも以上の笑顔がそこにはあつた。

「それは構わないけど、ちよつとびっくりした」

クラーニアの顔には、嬉々とした色も見える。予想していた反応と、ずいぶん違つような。

逆にボクは、苦笑い。どう答えていいか分からなくなる。

「でも、旦那様の相手がミコトで良かった」

クラーニアがボクに顔を近付け、囁いた。

「どうして？」

「だって、第二夫人がミコトなら仲良くして貰えそうだし」

ちよつと、もう、何を言い出すの、クラーニア！

さすがにボクは慌てふためいた。今の、ラン＝シー様には聞こえてないよね？

「顔が真っ赤よ、ミコト。本当に可愛いんだから」

「だって、クラーニアが変なことを言うから」

「あら、わりと現実的だと私は思うんだけどな」

それは、ボクの正体を知らないからで。知ったら、どう思うんだろう、クラーニアは。

もし、受け入れて貰えるなら、本当のことを話したい。ふと、そんなふうに思った。

ほつとくと何を言い出すか分からないクラーニアを追い返し、そそくさと着替える。それをラン＝シー様に見られているかと思うと、恥ずかしくて、腹立たしい。こっち見ないでって言ってるでしょ！

朝食後。ボクが部屋から出ると、それをアルウィリアに見咎められた。

「ジルラー様の次は旦那様？ あなたのように可愛い方が色目を使えば、殿方はさぞ喜ばれるでしょうね」

冷めた物言い。侮蔑の眼差し。ある程度は予想できた反応だけど、やっぱり応える。アルウィリアのこと、そんなには嫌いじゃないか

ら、余計に。

「いけないかしら？」

「その顔が卑怯よ。まるで私が苛めて^{いじ}いるみたいじゃない。あなたを見ていると本当に苛々^{いらい}するわ」

「なら、私のことは構わないでくださる？」

ボクは、逃げるように書庫へと向かった。ラン＝シー様が読む本を探すためだ。

誰かと擦れ違つたたび、視線が気になった。みんながボクを見ているような気がしてくる。ボクがラン＝シー様の部屋で一夜を過ごしたことは、もう知れ渡っているのかな？ 出来れば夫人にだけは知られたくないけど、たぶん時間の問題だと思う。

部屋に戻ると、ラン＝シー様が優しい顔で迎えてくれた。それが、ボクには救いだった。

「今すぐお読みになりますか？」

「いや」

「他に何か、御用はお有りですか？」

「側にいてくれたら、それでいい」

そんなふうに使われると、悪い気はしない。ボクは靴を履いたままベッドに腰掛けた。図々しくも、少し身体を傾げるだけで寄り掛

かれそうなくらい、ラン＝シー様の近くだ。何を、というわけではないけど、ちよっと期待してみる。胸が高鳴った。

ほら。力強い腕。引っ張り込まれる。抗うという選択肢は、ない。抗えないことが言い訳だった。

このまま、ずっと抱き締められていたい。時が止まってしまえばいい。そう願った。

けれど、夢のような時間は長くは続かなかった。扉を叩く音。嫌な予感が、した。

「わたくしです」

紛れもなく、夫人の声だった。

このときボクは、取り繕うことしか頭になくて、ラン＝シー様の腕を振りほどこうと必死になった。

もう、どうして放してくれないの！

「協力」

ラン＝シー様が耳許で囁いた。確かに協力するとは言ったけど。困惑が、抵抗を奪う。ボクは、全身から力が抜けていくのを感じた。そして、最悪の形で夫人の入室を許すことになる。

ラン＝シー様に抱き締められているところを、完全に見られてしまった。もう言い訳も出来ない。ボクは落胆し、諦めた。

ボクを捕らえていた腕が緩む。今更だけど、ボクはベッドから降りた。どう思われていようと、ここから先は召使いらしく振る舞う。

「お邪魔だったかしら？」

僅かに声の上擦っている。夫人にとっては精一杯の強がりなんだと思う。

「いや、どうせ何もしていない。怠惰に過ごしていただけだ」

「何も？　今、ここで見たことも、何もなかったと仰有るの？」

「些事だ」

「ラン＝シー様が本気だと仰有るなら、わたくしは何も申しません。ミコトはラン＝シー様に差し上げたのですから、お好きになさいませ」

夫人が、覇気もなく言い放つ。何かを待つような眼差しで、一呼吸。何も得られないことを知ってか、視線を落とすと、彼女は背を向けた。

今、どちらかを選ばなければならないとしたら、ボクは夫人を追い掛けたかった。それが出来ないことも分かっていた。

扉が、静かに閉じられた。

再び二人きりになって、ボクはラン＝シー様を見つめた。穏やかだけど、何を考えているか分からない表情だ。

「あんな仰有りようでは奥様が可哀想です」

「其方は本気で、あれを心配してくれるのだな」

「なら、どうして」

「側に仕えていたら分かるだろう、あれは正直すぎる。隠し事が出来ない性分だ」

「それにしても、他に言い様はなかったのですか？」

「どう言ったところで同じだ。セライスタが私の部屋に訪れるなど、どれくらいぶりだと思う？ ミコトの様子が気になって仕方がないから、わざわざ覗きに来た」

「それは、私とラン＝シー様の仲をお疑いだからです」

「そうだろうな。ならば、その場で取り繕っても同じだ。見たいと思う現実を見せてやれば、少なくとも納得はするだろう」

「あれが、奥様の見たい現実だと仰有るのですか？」

「見たくない、の間違いじゃなくて？」

「あれが、セライスタの思い描いた現実だ。それ以外の現実は、彼女の中で否定される」

ラン＝シー様が手を伸ばした。来い、と言っているの？

ボクは戸惑いながらも、ラン＝シー様に近寄った。すると、引つ

張り込まれた。顔が、近い。

「それに、セライスタは間違っていない」

どういう意味？　と思つたら、天地がひっくり返つた。仰向けにされたボクの、すぐ目の前にラン＝シー様の顔がある。また、戯れ？

不意に、唇が重ねられた。すぐ離れて、また近付く。悪戯っぽい笑みが見えた。やっぱり戯れなんだ。ボクは、目を閉じた。

ラン＝シー様のお世話をするのは、楽しい。それが直接的なことでもなくて、例えば部屋の掃除をしているだけでも、心が弾む。同じ空間、同じ時間を共有している感じがするから。

本を読み耽っていたラン＝シー様が、存在を確かめるかのようにボクを見る。何か言うわけでもなく、また視線を落とす。そんな光景が、なぜだか輝いて見えた。

このまま時が止まればいい。たぶん、今。ボクが知る、最上の輝きだ。こんなにも上質な時間を、ボクは知らない。もう二度と、訪れないかも知れない。次に目覚めたときには違う世界にいるかも知れない。明日が、怖い。こんなにも怖い世界を、ボクは知らない。

終わらせよう。ボクの手で。この、美しくも儂い世界を。　。

来て欲しくない夜が訪れた。ラン＝シー様と過ごす二度目の、そして最後の夜だ。

最初の夜は、ラン⇨シー様の優しさに身を委ねた。最高に幸せな朝も迎えた。だから、それ以上の朝は、もう訪れない。色褪せるか、その前に壊れるか、どちらかしかない。なら、壊れる前に壊してしまおう。そうすれば、いつ壊れるか分からない、という恐怖からは解放される。

懐剣を、ラン⇨シー様の寝室に持ち込むことは簡単だった。ラン⇨シー様は、ボクの行動を疑いもしない。ボクを、完全に信じ切っている様子だ。

あとは、懐剣をラン⇨シー様の胸に突き立ててれば終わる。もう決めたことだから、迷わない。懐剣を抜き、その白刃を闇に振りかざせば、迷いも吹き飛ぶと思っていた。迷えば、ボクの命が危うくなる。そんなときに迷うはずがないと思っていた。

風のない静かな夜。ボクは、懐剣を握り締めたままラン⇨シー様の寝顔を見つめていた。

どうすれば終わらせられる？

どうすれば迷いおもを断ち切れる？

どうすれば胸の痛みを消し去れる？

そうだ。お別れのキスをしよう。本当に、それが最後だ。

ボクは、そつと唇を重ねた。

本当は、もっと語り合っていたかった。側にいられば、それだけで良かった。何もしないという贅沢を、一緒に味わっていたかつ

た。

「泣いているのか？」

低い声がした。

涙が落ちていたことに、ボクは気付かなかった。

頭の中が真っ白になる。思わず、懐剣を振り下ろしていた。

尋問

何も無い小さな部屋。明かり窓には鉄格子。頑丈そうな扉には、中を覗くための小窓。廊下に見張りが立っていれば、いつでも覗かれることになる。その『仕置き部屋』にボクは閉じ込められていた。

理由は、デユミール侯爵の暗殺に失敗したから。

でも、これで良かったんだと思う。ラン＝シー様を殺すなんて、やっぱりボクには無理だ。あのときラン＝シー様を殺していたら、たぶん泣き崩れて、逃げるどころではなかったようにも思う。どっちにしても囚われの身だ。でも、後悔はしていない。むしろ、安堵感を覚えていた。

なんで、こうなっちゃったのかなー？ 途中までは思惑どおりに進んでいると思ったのに。

ラン＝シー様なんて、ちょっと顔がいいだけで、性格は最悪^{なかみ}。夫人を大切にしないラン＝シー様に、ボクは腹を立てていたくらいだ。それ以上に、お金が、ボクには必要だった。ユヒラお姉様を身請けするための、お金が。どれくらい積めば、デイヴェラージエ伯が首を縦に振るか分からないけど、他に方法は思い付かないから。

だから、任務に私情は挟まないつもりだった。たとえラン＝シー様を好きになったとしても、最後には感情を切り離せると思っていた。それが、出来なかった。

総てはボクの弱さが招いたことだ。多くを望みすぎて、結局、何も得られなかった。

ユヒラお姉様と一緒に暮らしたい。

ランシー様に可愛がられたい。

夫人とも仲良くしたい。

どれも、叶わなかった。

そして今、ボクの命運をひとりの男が握っている。執事のガイド・ジルラー。都では使われていない変な名前だから、ちょっと言いにくくて、殆ど上の名前で呼ばれることがない。本名は、ガイドリア・ノルドニエラ・ジルラー。確かに言いにくいし、覚えにくい。こう、舌に絡む感じで、ねっとりしているというか。考えると、笑っちゃうけど。

でも今は、笑ってる場合じゃない！ そのジルラーが怖い顔で立ってるんだもん。不機嫌そうなのは朝が早い所為ばかりじゃないと思う。ボクが、やらかしたからだ。

「正直に申せ。閣下のお命を狙った理由は何だ？」

あんまり上から睨まないでくれる？ ただでさえ怖いんだから。

ボクは、寝心地がいいとは言えなかったベッドの上で、膝を抱えていた。

「言ったら怒る？」

「今でも充分怒っている」

「怒ったら怖さ倍増だ。やめてよね、睨むの。」

「じゃあ言わない」

「じゃあ?」

「ジルラー様、怖い」

「当たり前だ。私は敵に優しくするほど甘くはない」

「やっぱり本気で怒ってる。睨むし、怒鳴るし。うるうる……。……。」

「そうしてボクが泣きそうになると、ジルラーの奴、更に怖い顔をするんだもん。」

「今度は何を企んでいる?」

「もう帰りたい。ラン＝シー様には嫌われちゃったし、ジルラー様は怖いし」

「ダメ。我慢できなかった。ラン＝シー様の名前を出したら、涙がこぼれちゃった。」

「きっともう、口も利いてもらえないよね。そう思うと無性に悲しくて。」

「悔しいな。ジルラーの前では泣いてばかりだ。」

「本当はボク、桜華流小太刀の正統剣士なのに。本当は凄く強いのに。」

に。

「本当は奥様にも嫌われなくなかったのに。ブランドン、可愛いのに」

変なこと口走るし。涙は止まらないし。ああ、もう、見ないで。

「其方、誰かに強要されたのか？ 閣下を殺せと」

ほんの少し、ジルラーの口調が柔らかくなった。気のせい……じゃないよね？

ボクは黙って首を横に振った。

改めて実感。ジルラーにも優しくされたい。

怖いジルラーは嫌いだけど、優しいジルラーは嫌いじゃない。

「其方が総てを話すまでは、私もここを動かん」

じゃあ、ジルラーは一生そこで立ってるつもりなんだ。だってボク、依頼主のことだけは絶対に話さないから。こう見えて、口は堅いんだ。

ボクは、膝に顔を埋めた。絶対に話さない、という姿勢だ。

途中からジルラーが怖くなくなったから、ボクも平静を取り戻すことが出来た。大丈夫。もう泣いたりはしないから。

朝食は、召使いとして働いていたときと同じ物が出された。朝食後には、手拭いやら水桶までが用意されて、普段どおりに身体を清めることが出来た。誰の配慮かは知らないけど、囚われの身とは思えない優遇だ。ずっと見張られていて、ちよつと落ち着かないという以外は、特に不自由もなかった。

扉から背を向ける格好で、身体を拭いていると、見張り役の青年が不躑に話し掛けてきた。

「綺麗な背中だな」

二十歳そこそこの、これと言って特徴のない青年だ。珍しくもない栗色の髪に、薄暗い場所では黒くも見える褐色の瞳。顔立ちに華があるわけでもない。と言って、不細工というわけでもない。要するに、印象に残らない風貌だ。

「あまり見ないでくださる？」

もう演技する必要はないけど、よく分からない相手だし、そこはかとなく気品を漂わせてみよう。待遇が良くなるかも知れないし。

「そもいかない。それが俺の仕事だから」

ああ、そうですか。

「こつして水桶を持ってきてくださるのは、どなたの御厚意なのかしらっ。」

「俺」

「どござって」

「そりゃあキミの裸を見られるから」

馬鹿なの、この人？

ボクが言葉に詰まっていると、「嘘に決まってるだろう」と来た。

「ジルラー様の指示さ。この屋敷のことは総てジルラー様に取り仕切ってるんだから、他に誰がいるって言うんだい？ それよりさ、キミも馬鹿なことをしたね。旦那様の寵愛を受けて、それで満足してりゃあいいのに」

「私が何をしたか御存じなの？」

あのととき、異変を察知した従僕が部屋に飛び込んできて、ちょっとした騒動にはなったけど、殆どの使用人たちは何が起こったかは知らないはずだ。ジルラーの機転で、速やかに仕置き部屋に放り込まれてしまったのだから。

すっかり口止めされているらしく、ボクを見舞ってくれたクラリアニアですら、事態を全く把握していなかった。むしろ、ボクに同情してくれたほどだ。

「キミには最初から目を付けていたんだ」

「私が可愛いから？」

冗談だつてば。

「それもあるけど、キミさ、手際が良すぎたんだよね。いきなり奥様に取り入ったと思ったら、もう旦那様に可愛がられてる。まあ、^{ギョーム}暁矛の出身だって聞くし、それだけの容姿なんだから納得も出来るけど、ただの召使いにしては有能すぎるっていうか、完璧すぎる。だから、キミの動きに関しては探りを入れていたんだ。そうしたら、あの騒動だろ？ 現場を見なくても分かったね。キミ、旦那様の首を狙っただろう？ 別に責めてるんじゃない。俺はデュミール家には義理のない人間だから」

驚いた。彼の分析は実に正確だ。しかも、ボクは彼の存在にすら気付いていなかったのに。いや、地味すぎて記憶に残らなかったんだ。この屋敷には他にも多くの人間が働いているから。

「見てきたようなことを仰有るのね」

「隠さなくてもいいよ。俺はキミの敵じゃない。もしキミが望むなら、ここから逃がしてやってもいい。だって、このままじゃ不味いだろう。まともなカラダで仕置き部屋を出られると思うかい？」

思わない。

「あなたは、どうして私に肩入れしてくださるの？ もし、あなたの言うとおり、私が旦那様の首を狙ったとして、そんな得体の知れない私を、どうして助けてくださるの？ あなたの目的は何？」

ちよつと怪しいし、信用は出来ないけど、相手の話に乗ってみる価値はあるのかも。

「得体なら知れてるさ。キミは旦那様の首を狙った刺客で、今は途

方に暮れている、可愛い女の子だ。そして、俺の力を必要としている。それだけで充分だろう？ 俺さ、この屋敷を出たら商いでも始めようかと思うんだけど、キミに売り子さんになってもらいたいんだよね。キミみたいな器量好しが働く店なら、きつと大繁盛だ。言葉遣いは丁寧だし、立ち居振る舞いにも気品があるし」

やっぱり何者が分からない。大物なのか、ただの夢見がちな脳天気お気楽ぼんぼんなのか。それともボクを罫に嵌めようとしているのか。

でも、この条件は呑めないな。もし、ここから出られるなら、居酒屋サリクラーラで働きたいし。

「残念。ボク、女の子じゃなかったりするんだよねえ」

「あ、別に構わない。商売には差し支えないから」

即答？ 即答？

こいつ、意外と大物だ。

「ボクは差し支えるの！」

じろじろ見られているのも嫌だから、ボクは手早く身体を拭き、服を着直した。伯爵以外の人に見られていると、どうも落ち着かなくて。

水桶と手拭いを手渡し、にっこりと微笑む。その意味は、「拒否」だ。

「悪い話じゃないと思うけど。キミを助け出した上に、食いっぱぐれたキミを雇ってやるって言うんだ」

「でも、ボクを束縛するでしょう？」

「しないよ。側にいて貰いたいとは思っけど、キミの意思に任せる。商売が軌道に乗るまで店を手伝ってくれたら、それでいい」

「本当に、それだけが望みなのか？」

「それ以上の望みが、この世界に存在すると思っのかい？ キミと
いう宝珠を手にするためなら、俺のような愚か者は崖の上からでも
飛び降りる」

そういう、齒の浮くような台詞は似合わないって。軽く受け流そ
うとして、違う、と思った。真摯で、揺るぎのない眼差しだ。もし
かして、本気で言ってる？ ボクなんかを「宝珠」と言ってくれる
の？

気が付くと、彼の顔が間近に迫っていた。彼が、どうしようとし
ているのかは、容易に想像できた。でもボクは、逃げなかった。拒
絶の気持ちは浮かばなかったから。ボクが少しでも嫌がる素振りを
見せたら、たぶん彼は何もしなかったと思う。なんとなく、そう思
えた。

優しい口付けだった。それを、いったんは受け入れてから、そっ
と拒絶する。

「ごめんなさい、あなたはラン＝シー様ではないから」

「旦那様のこと、本気で好きなのか？」

彼が、まじまじとボクを見つめる。驚きを隠せない様子だ。

ボクは、微かな笑みで答えた。

ランシー様のこと？ 好きに決まってる！ 考えると泣けてくるから、あんまり考えないようにしてるけど。

「なら、どうして？」

「仕事だから。報酬が破格だから。お姉様を取り戻したいから。分かった？」

それと、伯爵の期待を裏切りたくなかったから。

「分かるわけがない。本当に理解しがたいな、キミは。それが魅力でもあるんだが」

「だから、あなたと一緒にには行けません」

「キミは馬鹿だ。俺のことなんか途中で裏切ってしまったえばいいんだ。好きな人を裏切れることは出来て、どうして割り切ることが出来ないんだ？」

「あなたは優しい人だね。こんなボクを本気で心配してくれて。でも、あなたを巻き込むわけにはいかないから。もう行って。こんな場所でも、いつ人が来るか分からないし」

「もし気が変わったら、言ってくれ。キミのためなら、少しくらい

の危ない橋も渡ってやれる。いや、ぜひとも渡りたい気分だ」

最後は冗談っぽく笑った彼を、ボクは部屋から追い出した。

理想

ぼんやりと過ごすしかないボクにとって、訪問者というのは有り難い存在だった。それが、話をしたいと思っていた人物なら尚更。まさか、彼女が訪ねてきてくれるなんて思いもしなかったけど。

侯爵夫人セライスタ。彼女には、もう見向きもされないと思っていた。それだけに、ボクの驚きは大きかった。

「奥様！」

さすがに蹲うずくまっているわけにはいかないから、ボクは立ち上がった。おずおずと扉の前まで進み出る。閉ざされた扉を挟んで、向かい合った。

何を話せばいいのか、言葉が見つからない。本当は、合わせる顔もない。ボクは、色んな意味で夫人を裏切ってしまったのだから。

けれど、覗き窓から見える夫人の顔は、怒っているようでも、蔑んでいるようでもなかった。強いて言えば、優しそうな。

「可哀想に。このような狭い部屋にミコトを閉じ込めるなんて、許せませんわ。どうせ大した理由もないのでしょうか。ねえ、ミコト？」

夫人が腹を立てている相手は、驚いたことにボクではなかった。

「奥様は何も御存じではないのですか？」

「ジルラーモラン＝シー様も、わたくしには何も教えてくれません

の。わたくしには関係のないことだと仰有つて。酷いと思いません？ ミコトが酷い目に遭っているのに。ならば、ジルラーが何を言おうと関係ありません。わたくしが、この部屋から出して差し上げますわ。その代わり、わたくしの許に戻ると約束してくださいさる？」

「また、奥様にお仕えするのですか？」

それは、ボクにとって意外な申し出だった。だって、夫人のお世話をするなんて、もう叶わないことだと思っていたから。

「不服かしら？」

「いいえ。ただ、お許しただけなんて思っていないかったので」

「許すも何も、わたくしが勝手に機嫌を損ねただけで、ミコトは何も悪くはありませんわ。わたくしの方こそ許していただけるかしら、ミコト」

「そんな、勿体ないお言葉です、奥様」

「それなら、こんな辛気くさい場所からはさっさと出てしまいいましよう。話は、わたくしの部屋で伺いますわ」

春の花畑を思わせる、柔らかな笑顔だった。やっぱり、彼女は笑っていた方がいい。この笑顔が無垢であるほど、ボクは罪の重さを痛感する。結果的に何事もなかったとは言え、夫人から愛する人を、その命を奪おうとしたことは事実だ。誰に許されたとしても、ボクはボクを許せない。

「御厚意には感謝いたします。でも、私は罰を受けている身ですの

で、この部屋から出していただくわけにはいきません」

ボクがラン＝シー様を殺そうとしたと知れば、さすがに夫人も許してはくれないと思うし。それとも、その無垢なる笑顔でボクの罪さえも洗い流してくれるのかな。

「その通りです、奥様」

その声は、夫人の背後から聞こえた。いつの間に近付いたのか、ジルラーが部屋の外に立っていた。気配を消して近付くなんて、ほんと趣味が悪い。だいたい、いつから立ち聞きしていたんだか。油断も隙もあつたもんじゃない！

「勝手なことをされては困ります。不始末をしたミコトには、反省して貰わなければなりません」

ここからは見えないけど、ジルラーの仏頂面が目に浮かぶ。

「どういった不始末なのかしら？」

「それは閣下にお尋ねください」

「ラン＝シー様が教えてくださらないから、あなたに訊いているのです」

「閣下がお話しにならないことを、執事の私がお教えできるはずもありません」

今の、物凄く意地悪な物言いだ。俗に言う、たらい回し。もっと他に言い方つてもものがあるでしょう、ジルラーの馬鹿！

「ミコトさえ返していただければなら、立ち入ったことを訊こうとは思いません。どうせ、あの方はわたくしには何も話してくださらないのですから。しかし、わたくしのミコトを、理由も告げず閉じ込めておけると本気で思っているのかしら？ 出過ぎた真似をしているのはジルラー、あなたです」

強気のセライスタ。頬を紅潮させて、それはそれで可愛いんだけど、必死の訴えだ。それも、ボクのために。

たぶん、ジルラーが引き下がることはない。正論も感情論も、ジルラーの前では無意味だ。議論を重ねても、夫人は傷付くだけだと思う。そうなる前に、夫人には諦めて貰わないと。

「奥様、もう充分です。そのお心だけで私は救われます。私は、奥様のお顔を見られただけで嬉しいです」

「ミコト」

「心配なさらないください。仕置き部屋と言っても、食事は普段と変わりませんし、何も酷いことはされていません。不自由があるとなれば、奥様のお世話をさせていただけないことくらいです」

ボクの説得と微笑みは効いたようだ。夫人が、切なそうな溜息をひとつ落とした。上気していた顔にも落ち着きに戻る。よっぽどボクのこと気が懸かりだったのかな。

遠ざかる足音が聞こえる。ジルラーだ。近付くときには気配を消していたのに、わざとらしいというか。

ジルラーの気配が完全に消えてから、夫人が不機嫌そうに口を開いた。

「ジルラーは嫌いです。あんな男、どうしてラン＝シー様は側に置かれるのかしら。ミコトは苛められていない？」

「いいえ、奥様。ジルラー様には可愛がっていただいています。本当ですよ」

「そうだとしたら、ミコトが可愛いからですね。あの冷酷な男でも、ミコトの前では頬が緩むのかしら」

いや、それはないと思う。たぶん、ボクが有能な召使いだからだ。と言いたいところだけど、それも違うような気がする。そもそも、ジルラーは、どうしてボクを採用してくれたんだろう。あんな短い面接で、ボクの何を判断したのかな？

「ところで、ミコト」

「はい、奥様」

「正直に答えてくださる？」

「何を、でしょう」

ちょっと嫌な感じ。

「ラン＝シー様のこと、どう思っていますか？」

来た！

夫人にとつては、召使いが犯した不始末よりも、恋敵の真意が気になるわけだ。

ある程度は覚悟していたから、取り乱したりはしないけど。

「好きです。ごめんなさい！」

言っちゃった。この期に及んで誤魔化せるとは思わないし、弁明の余地もないから素直に謝るしかない。夫人も、そんなことは承知の上で訊いてきたのかも知れないし。

「ミコトが謝る必要などありませんわ。正直に申し上げて、わたくし、安心いたしました」

「どつという意味でしょう？」

「もし、ラン＝シー様がミコトの気持ちを考えていらつしやらなかつたら、わたくし、あの方を絶対に許さなかつもりでした。だつて、わたくしを見るミコトの目が、何かを訴えているようで、つらかつたんですもの」

「それは、奥様に申し訳ない気持ちで」

「わたくし、なかなか子が授かりませんの。ですから、ラン＝シー様にも側室を娶るようにと申しましたら、あの方、わたくしの生家に失礼だからと、一切お受けにならないのです。わたくしの生家に義理立てすることよりも、デュミール家の跡目を心配なさるべきですのね。でもミコトなら、ラン＝シー様も好いていらつしやるみたいだし、もし、ミコトが嫌でないのなら、わたくしの代わりにデ

ユミール家の跡取りを産んでいただきたいの。そんなお願い、厚かましいかしら？」

そういう趣旨の発言があったことは記憶している。書庫で、ボクとラン＝シー様が一緒にいるところを夫人に目撃されたときだ。でも、あのとき夫人は機嫌を損ねているようだったから、まさか本気だとは思わなかった。いや、普通は誰も本気だなんて思わない！

「でも奥様は、私がラン＝シー様と御一緒していると不機嫌になれるので」

「それは、わたくしのミコトをラン＝シー様が横取りなさったからですわ！ わたくしは、ミコトがラン＝シー様だけにお仕えするのが嫌なの。あの方がわたくしの相手をしてくださらないのは仕方がないとしても、ミコトまでも取り上げられたら、わたくし……」

興奮ぎみに捲し立てる夫人は、なんだか可愛らしい。まるで、人形を取り上げられた少女のようだ。ボクより年上だけど、そうは見えないときがある。ふわふわとして可愛いし、感情の起伏が激しいから。その激情がボクのためだと思うと、切なくなる。

「本当は、わたくしだってあの方のお役に立ちたいの。でも、あの方は本当に時間が空いているときしか、わたくしの部屋には来てくださらない。それなのに、ミコトは一日中お仕えすることが出来て、わたくし、少し妬けましたわ。わたくし、ラン＝シー様のお側にもいたいんだけど、ミコトも手放したくはないの。分かっていただけるかしら？」

夫人が、どう思っていたのか。ボクにも、やっと理解できた。同時に、夫人の願いを叶えて差し上げられないことも。

ボクは、返事に詰まった。

「わたくし、理想がありますの。ちょっと恥ずかしいんですけど」

夫人が恥ずかしそうに微笑む。顔を赤らめて。

侯爵夫人セライスタが描く理想。そんなにも恥ずかしがるような理想って、いったい何？

「わたくしとミコトとラン〓シー様と、三人で小さなテーブルを囲んで、紅茶やお菓子などをいただきながら、のんびりとお話するのが夢ですの。こんなの贅沢すぎるかしら」

切ないよ。そんな有り触れた日常を、夢だなんて。切なすぎるよ。

溢れる涙を、ボクは止められなかった。もう、どうしたらいいかわからなくて、ただただ涙に暮れる。立ち尽くしたまま泣いているボクを見て、今度は夫人が取り乱した。

「どうなさったの、ミコト？ わたくし、変なことを言ってしまったかしら？」

心配顔。可愛い顔を見せて。眼差しは、この上なく優しい。

この人から笑顔を奪うことが、どうして出来るというのだろう。

「じゅめんなさい」

泣きながら、ボクは謝った。それしか、出来なかった。泣くこと

でしか、自分を許せなかった。

泣き続けていたら、扉が開いた。ボクは嗚咽を抑えられなくなっている。ふんわりと抱き締められた。セライスタ。ボクを包む風。今は優しく吹いている。

形見

晴れやかな朝だった。狭い部屋に閉じ込められ、肉体的には不自由を強いられているけど、心は束縛されていなかった。むしろ、解放されていた。昨日、たくさん泣いたからかも知れない。セライスタという優しい風が、ボクを高い空へと運んでくれた。

朝食を済ませ、しばらくすると、ラン⇨シー様が現れた。怪我した足を引きずる様子もなく、もう普通に歩いている。どういふ回復力なの？ 実は、そんな大した怪我じゃなかったとか？ どっちでもいい。ラン⇨シー様の元気な姿を見られて、ちよつと嬉しかった。

だけど、それをボクは顔には出さなかった。ラン⇨シー様の前では、無表情、無感動を貫く。そう決めた。心を動かされたら、負けだ。

「其方のこと、少し調べさせた」

挨拶もなく、ラン⇨シー様が事務的に切り出した。そこに、特別な感情は見取れない。あんなにも可愛がってくださったのに、今は、もう敵同士ということ？

「其方はノールボワ家からの推薦で当家に来たはずだが、面白いことに、ノールボワ家では金を積まれたから名前を貸したただけだというのだ。しかも、相手の素性は確かめなかったそうだ。胡散臭い話だが、事実だろう」

そんなことだろうと思った。あの伯爵が、手掛かりを残すような真似をするはずがないもん。ボクでさえ伯爵の素性は知らないんだ

から。たとえ拷問を受けたとしても、口を割りようがない。そういうところ、ほんと抜け目がないよね。

「ところで」

ラン＝シー様が、手に持っていた物をボクの前に差し出した。布にくるまれている、棒状の何か。中身は、黒光りする懐剣だった。そう、他の宝石類は手放しても、唯一それだけは手放さなかったという、お母様の形見の。

ドキッとした。どうしよう。動揺してる、ボク。

「この懐剣、何処で手に入れた？」

「母に、貰いました」

咄嗟に、いい嘘が思い付かなかった。

「ほう。それは興味深い。この『六芒星に燕子花』が彩王家の紋章であることを知っているのか？」

調べた、と言うだけのことはある。紋章から、彩王家に行き着くなんて。考えが甘かったのかも知れない。大失態だ。

ボクの素性が明らかになれば、家名を傷付けることになる。それだけは死んでも防がなければならぬ。

本当は、ミコトという名前さえも捨てるべきだったけど、お母様にいただいた大切なものだから、どうしても捨てられなかった。それに、ボクと同じ年に生まれた子供はミコトという名前が多いから、

その線から探られることはないと思っていた。高貴な名前にあやかることは、わりと一般的な習慣みたいで、城下町はミコトだらけなんだとか。

同じ名前が多いだけに、貴族にとっては家名こそが大切になる。

彩王家は『花の祭司』を務めてきた家柄だし、土地を持っているだけの貴族とは名前の重みが違う！

彩王家とは関係のないところで、ボク個人が踏み付けられるなら、それは構わない。だけど、家名を踏み付けられるわけにはいかない。絶対に！

だからボクは、彩王家とは無関係の人間として、死ぬ。

彩王家に泥は塗らない。栄光だけを遺す。

「私が火事場から盗んだとでも仰有るのですか？」

懐剣は、盗んだことにすればいい。そう思わせるためにも、不遜に振る舞う。火事場泥棒なら、たぶん自分の物だと主張するはずだ。

「なるほど。では、質問を変えよう。懐剣をくれたという母御の名を聞きたい」

次から次へと、ボクを困らせるような質問を。まさに、ネズミを追い詰める猫の如しだ。性格の悪さが滲み出てるよね。

「忘れました」

ラン＝シー様は、ボクに何を喋らせたいの？

「返すぞ」

いきなり、ラン＝シー様が懐剣を放り投げた。予想外の展開。ボクは慌てた。

次の瞬間には、懐剣はボクの腕の中に飛び込んでいた。しっかりと懐剣を受け止め、安堵の息を漏らしたとき、ボクは失態に気付いた。

「その懐剣、古い物だが血糊は浮いていなかった。それどころか、一点の曇りさえも」

「何が仰りたいのです？」

限界だ。もう隠しきれない。

生唾が、ゆっくりと喉を通り過ぎていく。

「大切にしているようだから、返した」

心が、丸裸にされたような気分。恥ずかしくて、もうラン＝シー様の顔を見ていられない。お願いだから、ボクを見ないで。その視線がボクを追い詰める。

「第一王子は討ち死に」

え？

「側室ミネカと第二王子は、内乱の中で逃げ遅れ、焼け死んだと聞

いていた。二人の遺体は、今も王家の墓地に眠っているはずだ」

何を、言っているの？

「だから生きているはずはないのだ。いくら其方があの女ひとに似ていたとしても、他人の空似と考える方が自然だ。だが何故、其方が彩王家の懐剣を持っている？」

もしかして、ラン＝シー様は、お母様に会ったことがあるの？

有り得る話だ。デユミール家の所領は暁矛と隣接しているし、何かの折で暁矛キョウムを訪れることがあったかも知れない。暁矛に関する書物が多いのも、交流が深かったからだと考えれば辻褄が合う。

「懐剣は盗んだ物、と言えば御満足いただけるのでしょうか。何か勘違いなさっているようですけど、たとえ誰かに似ていても、私には関係ないことです」

声が、少し震えた。心臓は、張り裂けそうに騒ぎ立てる。ここままで、かな。

「其方は嘘が下手だ。盗んだ物なら、我が子のように胸に抱いたり
はせぬ」

皮肉にも、それまで心の拠り所となっていた懐剣が、ボクの立場を危うくする結果となってしまった。

「認めるか？」

その問い掛けが、ボクには「負けを認めるか」と聞こえた。まさに容赦ない攻撃だ。どうあっても、彩王家との繋がりを認めさせた

いらしい。

揺らぐことのない二つの檻に囚われ、ボクは息苦しさを覚えた。好きな人に見つめられたら、本当は嬉しいはずだけど、今はただ、遠くへ逃げてしまいたい気持ちだった。

もう、おしまいだ。守りたいものを、何も守れなかった。ユヒラお姉様も、彩王家も。

「ひどいです。私を殺すなら、ここまで辱めなくても」

じわつと涙が込み上げてくる。この瞬間ボクは、完全に負けを認めてしまった。

そりゃあ悪いのはボクだけど、こんなふうに鬨るなんて、あんまりだ。いっそ、この懐剣で。

「そうではない！ 其方を追い詰めてしまったのなら謝るが、そうではないのだ。私自身、確信が持てなかったのだ」

ラン＝シー様は、いったい何を謝っているのだろう。悲痛な表情と、その向こうに見える真摯な眼差しが、いったんは崩れそうになったボクを、叱咤する。

「其方は知らぬだろうが、暁矛王は生前、こんなことを言っていた。私が死んだとき、息子たちが成人していなければ、貴殿に後見人を頼みたい。また、その時点で姫の婿が決まっていなければ、それも決めてやって欲しい。もし貴殿が貰ってくれるというなら、それでも構わんが、と。そして暁矛王は、大らかに笑ったものだった。デユミール家の当主になったばかりの私を信頼し、そこまで言うてく

れた彼を、私は今でも尊敬している。だが私は、託された王子たちを守る事が出来なかった。言い訳にしか聞こえないだろうが、暁矛で内乱が起こったとき、私は辺境の小競り合いを収めるために、遠征に出ているのだ。知らせを聞いて駆け付けたときには既に遅く、唯一生き残ったとされるユヒラ殿も、デイヴェラージェ伯の許に引き取られてしまっていた。この四年間、私は、自分の至らなさを責めることしか出来なかった。我ながら情けない話だ。だが、そんな私を救うかのように、其方が現れた。ミネカ殿に似た風貌も、第二王子と同じ名前も、最初は偶然だと思っていた。むしろ逆に、其方を送り込んできた、ノールボワ家の意図を考えたりもした。それでも、嬉しかったのだ。探し求めた鳥が前触れもなく舞い込んできたような、浮かれた気分になっていた」

ラン＝シー様は、長い呪縛から解き放たれたような安堵感を、その端整な顔に浮かべた。

逆に、想像もしなかった告白を聞かされたボクは、いつべんに理解することが難しく、呆然としてしまった。

「私では、其方の騎士にはなれないか？」

ボクの騎士に？ なってくれるの？

長くて難しい話よりも、ボクにとっては大切なこと。それは小さな言葉でしかなかったけど、くすんでいたボクの心を、鮮やかな色に塗り替えてしまうものだった。

鈍色の空が割れて、金色の光が射し込むような感じ。

それまでこだわってきたことが愚かしくさえ思えた。

もう、立ち止まっても、いいよね？

歩き疲れちゃった。

ずっと、ひとり歩いてきたけど、もう歩けないよ。だって、歩いて歩いても、誰も頭を撫でてくれないんだもん。

涙が、頬を伝っていた。

ラン＝シー様の顔が間近に迫ってきたかと思うと、次の瞬間には、力強い腕に抱かれていた。

涙が総て、温かい胸に落ちていく。想いも総て、同じ場所へと落ちていく。ボクを優しく包み込む、大きな空へと落ちていく。

「其方の涙は私が受け止める。其方は私が拾った雛鳥 誰にも渡さぬ」

喜びとか、悲しみとか、そういう感情はなかった。ただ、大きな翼よくに包まれているという安堵感だけが、ボクの心を支配していた。

訣別

斯くしてボクは、罰を受けることもなく、仕置き部屋から出られることとなった。とは言え、ただの召使いに戻るわけにもいかず、そもそもボクは伯爵に雇われた暗殺者で、いつまでもデュミール家に居座れるはずもなく、潮時を考えなければならなかった。

ランシー様は、ギョーム 暁矛王家の遺児であるボクを可愛がってください。夫人は、まだボクの正体を知らないから、以前と変わりなく接してくれる。でもジルラーは、さすがにボクを許してくれそうになり。ボクが、依頼主について頑として口を割らなかつたものだから、まだ疑いの眼差しを向けてくる。だから、その目が怖いんだって！

いくら睨んだって絶対に口は割らないから。たとえ伯爵がボクを見捨てたとしても、ボクは伯爵を売らない。それくらいの恩は、受けた。

もし、伯爵が救い出してくれなかつたら、ボクは今でも鎖に繋がれていたと思う。或いは、死んでいたかも知れない。気が触れて、ボクがボクでなくなっていたかも知れない。今のボクがあるのは、伯爵のおかげだ。

ジルラーは、こつこつも言っていた。

「其方を閣下に引き合わせたのは私だ。だから、此度のことは私の責任だと言える。暁矛王が亡くなられてから、閣下は暁矛の地を得ることだけに固執されてきた。そんな閣下のお心を和らげるため、其方を雇い入れることにした。其方を最初に見たとき、もう決めていたのだ。暁矛の民であるミコトを側に置けば、閣下も屋敷での時

間を少しは大切になさるだろう、そんな考えからだつた。案の定、閣下はミコトを気に入られたようだつた。その上で、ミコトが閣下を思い遣つてくれるならば、こんな喜ばしいことはない。私の目から見て、其方も閣下に惹かれておられるように見えた。今でも、私の見立てに間違いはなかつたように思える。それでも、其方は閣下に刃を向けた

「ジルラーの見立ては九分通り正しかつた。こんなボクを信頼してくれて、嬉しくも思う。それだけに、よけい居たまれなかつた。

身の振り方を見つめ直す意味でも、少し時間が欲しいと思ひ、ボクは三日間のお暇をいただいた。

ジルラーには、「このまま戻らなかつたとしても驚きはしない」と皮肉めいたことを言われたりもしたけど、それも選択肢のひとつだとは思っている。特に、夫人に対しては別れの言葉が見つからないから。

そんなわけで久しぶりの我が家だ。集合住宅の二階。狭い路地から見上げると、窓が開いている。留守中の管理を隣のおばさんに頼んであったから、掃除でもしてくれているのかも知れない。お礼を言つとかないと。

「ただいま戻りました」

ところが

「お帰り、ミコト。そろそろ帰ってくる頃だと思つていたよ」

そこで待ち受けていたのは伯爵だつた。いつもに椅子に深々と腰

掛けている。優雅で、物憂げな、いつもの彼。頬杖を突く姿さえも絵になる感じた。

「伯爵、なんで？」

「運命の導きとでも言おうか、ミコトが帰ってくる日が私には分かるのだよ」

「う、嘘っばい」

伯爵のことだから、あちこちに密偵を放っていて、ボクの動きも報告させていたに決まってる。そういう人だもん、伯爵って。油断も隙もないと言うか。

「賢いね、ミコトは」

「ボクのこと、お馬鹿だと思ってるでしょ」

「ミコトは可愛いから好きだよ」

もう、まるつきり子供扱いだ。でも、そういうところが伯爵らしくて、安心する。

立ち止まって微笑んで、それからボクは伯爵の許へ駆け寄った。

「伯爵、ただいま」

体当たりするような感じで抱き付く。伯爵は受け止めてくれたけど、椅子は軋みを上げた。

「おやおや、しばらく見ないうちに、すっかり甘え癖が付いてしまったようだね」

「ごめんなさい、伯爵。今回の仕事、失敗しちゃった」

それからボクは、頭の中を整理できないまま今回の経緯を語った。デューミール侯爵を好きになってしまい、どうしても殺せなかったことを。

伯爵は失敗を責めるわけでもなく、穏やかに話を聞いていた。そんなには怒ってないと思うけど、やっぱりちよつと不安になる。物静かな人が怒ったら、実は凄く怖かったりして。

報告は総て終わったのに、伯爵が何も言ってくれないから、ボクの不安は膨らんでいく。

きつと怒ってるんだ。ボクの不甲斐なさを。

「おや、もう話は終わったのか。なかなか楽しい恋物語だったから、つい聞き入ってしまったよ」

「伯爵？」

思わず首を傾げてしまう。いったい何を聞いてたわけ？

「いや、済まない。あの男を揺さぶることが出来ただけでも今回は収穫だった。実際、ミコトが屋敷に上がってからは、こちら側への干渉が減って助かったよ」

「ほんと？」

ボク、役に立ったの？

逆に言えば、ラン＝シー様に迷惑を掛けた、という意味でもあるけど。

「それより、新しい仕事がミコトを待っている。考えようによっては、いいときに戻ってきたものだ」

新しい仕事と聞いてボクはドキツとした。正直、やりたくない。漠然と考えていたことだけど、もう暗殺の仕事は出来ないような気がしていた。デュミール侯爵を仕留められなかったボクに、殺しの仕事は無理なんだ。

伯爵に拾われてからのボクは、ひとつのことしか考えてこなかった。ユヒラお姉様を取り戻すこと。その思いだけがボクを支えてきた。その、叶えられないかも知れない未来だけが、幸せの形だと信じてきた。だから、この手を穢そうと、この身が穢れようと、平気でいられた。守るべきものを何も持たなかったのだから。

けれど、セライスタと会って、ラン＝シー様と会って、何かが変わってしまった。それが何かは、よく分からない。何がボクを変えたのかも。

「そのことなんだけど」

ボクは、歯切れの悪い口調で訥々と話し出した。

「ボク、この仕事から足を洗いたいと思ってる。伯爵が許してくれるなら、だけど。ボクにとっては伯爵の役に立てることが嬉しいし、

お金も貰えるから、どんな仕事だろうと続けてこられた。でも、今のボクには人を殺せない。たぶん、もう無理だと思う」

今でも、伯爵の役に立ちたいとは思ってる。伯爵の信頼を失いたくはない。冷ややかでもいい。見つめてくれていたら。全く見向きもされなくなるのが、つらい。やっぱり、役立たずになったボクのことなんか伯爵は要らないのかな？

ボクの訴えが届いたのか、届いていないのか、その表情からは読み取ることが出来ない。遠くを見据えて動かない瞳が、憤っているようにも見える。

伯爵が、ゆらりと立ち上がった。ボクを見てくれない。無言で、歩き出した。部屋の中を、ゆっくりと。二周して、不意に立ち止まった。

「姉を取り戻すという夢は諦めたのか？」

「そういうわけじゃ　　って、ボクそんな話、したかなー？」

声の上擦る。ユヒラお姉様のことは誰にも話してないはずだけど。やっぱり伯爵は油断できないね！

「あの日から、ミコトは随分と変わったな」

ボクに背を向けたまま、伯爵が感傷的な言葉を紡ぐ。逆に、ボクは言葉を失った。だって、そういう伯爵って見たことがなかったから。

「四年も経てば、雛鳥も巣立ちする。いつか、そういう日が訪れる

だろうとは思っていた」

「伯爵……」

こんなの、違う。こういう別れは嫌だ！

お願いだから、こっちを見て。そんなこと許さない、とボクを叱って。伯爵！

「姉に会いたくなったら、ディヴェラージェ家の別邸を訪ねるがいい」

伯爵は、ユヒラお姉様を知っている？ ボクが、暁矛の第二王子だということも？

ひとつの可能性として考えたこともあった。彼こそが、ディヴェラージェ伯その人ではないかと。

「彼は狡猾な男だから、ミコトを近付けたくはなかったのだが」

伯爵は、ディヴェラージェ伯の人柄を知るくらい近い存在で、ユヒラお姉様とも面識があった？ お姉様とボクの顔を見比べて、姉弟だと判断したの？

暁矛の第二王子が、姉を取り戻そうと必死になっているのを、素知らぬ顔で眺めていたというの？ それは普通、意地悪って言わない？

「その話、もう少し詳しく聞きたいものだ」

反射的に声の主を見遣る。乱暴に開け放たれた扉の向こうには、長剣を佩いたラン＝シー様が立っていた！

風が吹き抜けた。その美々しい姿に見惚れる　いや、見惚れる場合じゃなく！

まさか、伯爵とラン＝シー様が鉢合わせるなんて思わなかったから、ボクは焦りまくっていた。

「付けられたのだよ、ミコト」

そこには、いつもの落ち着き払った伯爵の姿があった。柔らかい表情とは対照的な、鋭い眼光も、本来の姿と言っていていい。敵に回すと怖い人っていると思うけど、そういう感じ。

「おまえか、陰でミコトを操っていた張本人は」

「表現は悪いが、さほど遠くもない」

伯爵は悠然と構えている。殺気立つラン＝シー様を前にしても、全く臆するところはない。

「ならば問う。誰の指図で私の命を狙った」

「私の背後に何者かが存在すると思っているのか？」

伯爵が薄い笑みを浮かべた。

「私は顔が広い。私が死ぬことによって得をするほどの人物が、私の知らぬ人間であるはずがない」

「乱暴な推理だが、方向性としては間違っていない」

「いちいち癪に障る物言いだ。最初は殺すほどのことはないと思っ
たが、気が変わった」

いつもの優しいラン＝シー様とは大違いで、腹立ちも露あに剣を抜
き放つ。ちよっと、ここはボクの家なんだよ！

そのとき伯爵はと言つと、見ているボクがゾクツとするような笑
みを浮かべていた。

「リユノック屈指の勇将と戦って無事に済むとは思っていない」

言うや否や、伯爵がボクの身体を抱き寄せた。銀色の輝き。ボク
の喉元に、それが宛がわれる。速すぎて見えなかったけど、革帯に
仕込んであったと思われる小刀だ。ボクを、どうするつもり？

喋れなかった。少し喋っただけでも喉が切れてしまいそんな気が
したから。

「何の真似だ？」

ラン＝シー様の問いは当然だと思う。ボクも訊きたいくらいだか
ら。

「手出し出来ぬだろう？」

「ミコトは、おまえの手駒ではなかったのか？」

「だから利用する」

伯爵の声は、冷え冷えとしていた。

違うよね、伯爵。これは作戦なんだよね？

ボクは信じてるから。だってボクを暗闇から救い出してくれた人だから。

「貴様」

ラン＝シー様が齒噛みした。その憤りがボクにまで伝わってくる。素直すぎる反応だ。もっと冷静な人だと思ったけど、思い違いだったのかなー？

「どうする？」

「やってみる。次の瞬間、貴様を八つ裂きにしてやる」

それは嬉しくない言葉だ。たとえ嘘でも、ボクを気遣う言葉が欲しかったのに。

「可哀想なミコト。おまえはラン＝シー・デュミールに愛されなかつたのだね。あんな男でも、おまえは命懸けで愛したのに。私を捨てても良いと思えるほど愛したのに」

優しい声だった。

ボクを捕らえている伯爵の左手が、ゆっくりと這い上がってくる。淀みなく胸を通り過ぎて、首、右の頬へと。涙を拭き取るような動

きで、細い指が目尻を優しく撫でた。切ないほどに、官能的。このとき既に、ボクの心は伯爵へと傾いていた。

「ミコト、そいつの言葉を聞くな。私は其方を愛している。だから」

「ばか。弱みを見せたら負けちゃうんだよ。」

「ラン＝シー様。少しでも私を愛してくださるのなら、このまま退いてください。そのときは、あなたの愛を信じます」

ボクは、ラン＝シー様の愛を疑ってはいなかった。伯爵がボクを利用していても分かってた。それでも、ボクは伯爵を裏切れない。ううん。身を挺してでも守ろうと考えている。だから、伯爵を逃がすための取り引きを、絶対に断れない形で持ち掛けたんだ。

本当は、もう侯爵家に戻るつもりはなかった。ここで伯爵に肩入れした以上、どう見ても敵対関係だもん。戻れるはずがない！

「お別れだ、ミコト」

耳許で、伯爵が囁いた。

「おまえは、そっち側の人間だ。ディヴェラージェ家へは行くな。私の、可愛いミコト」

背中を押されて、よろめいた。その勢いで、ボクはラン＝シー様の胸に飛び込む。

疾風。遠ざかる足音。ボクが振り向いたとき、伯爵は窓から身を

躍らせていた。

ボクを受け止めてくれたランシー様は、伯爵を追うことも出来ず、悔しがつた。腰に抱き付いたボクが、伯爵を追わせなかったというのもある。

私の、可愛いミコト。伯爵は、そう言った。それが偽りの言葉だったとしても、ボクは嬉しかった。

また、会えるよね？

大きな翼^{よく}が、ボクを包む。

ボクの心は、いつまでも揺れていた。

笑顔

ボクに生きる道を与えてくれた伯爵は、もういない。これからは、何をするにも自分で選ばなければならない。ずっと思い描いてきた未来が、全部幻だったように思えて、ボクは不安になった。

ボクは、何を選べばいいんだろう？

ボクは、何処にいるんだろう？

立っている場所さえ、分からなくなる。砂漠の真ん中に放り出されたような気分だ。砂に埋もれた道を、どうやって探せばいい？

休暇の一日目は、遠い空を見つめて終わった。

休暇の二日目は、居酒屋サリクラーラに顔を出してみた。馴染みの客は喜んでくれて、ここがボクの居場所であるようにも感じた。

休暇の三日目は、何をするわけでもないけど、朝から着飾ってみた。そうすれば、過去の自分を取り戻せるかも知れない。そんなふうに考えた。でも、霧は晴れなかった。

もやもやとしたまま、街を歩いた。何人もの男に声を掛けられたけど、なんか、どうでもいいという気分だった。印象にも残らない男と食事をして、別れた。

その夜も、サリクラーラで働いた。忙しくしている間は先のことを考えずにいられて、楽しかった。

そして四日目の朝を迎えた。本当なら、もう屋敷に戻っていなければならぬ刻限だ。

ボクは何も選ぶことなく、戻らないことを選んだ。だって、戻れるはずもないのだから。

夕刻には、ジルラーに宛てた手紙を届けさせた。これで本当に戻れないのだと思うと、どうしようもなく寂しかった。

サリクラーラで働いているときは楽しいし、充実感もある。でも、仕事を終えて、ひとりになると、例えようもない空虚な気持ちになった。

自由の空に解き放たれたはずなのに、あまり嬉しくはない感じがした。

何が足りないんだろう？

答えを探しながら、眠りに就いた。

次の日も、同じ朝が訪れた。代わり映えのない朝だ。また同じ一日を繰り返すのかと思うと、何もかもが億劫に思えた。

それでも、おなかは空くから、朝食を取った。

これから、どうしよう。

今まで決して座らなかつた伯爵の椅子に、初めて座ってみた。普通の椅子だ。でも、伯爵が座っていた椅子だ。

窓の外を、ぼんやりと眺める。青い空。白い雲。遠くで、鷹が舞っていた。檻の中にあるような気がした。

不意に、扉を叩く音が聞こえた。隣のおばさんかな？

まあ、いいや。気晴らしになるし。

扉を開けると、予期せぬ人物が立っていた。

「奥様！ どうして、ここに？」

侯爵夫人セライスタと、クラリーニアの姿もあった。

何が起こったのか分からず、ボクは慌てふためいた。ラン＝シー様が現れたとき以上の驚きかも知れない。

夫人が、まじまじとボクを見つめている。と思ったら、いきなりボクの胸に両手を押し当ててきた。

「な、何をなさるのです、奥様！」

ボクは咄嗟に身を退いた。鼓動が加速する。

「今はあなたの奥様ではありません。セライスタとお呼びなさい」

と言われても、今まで「奥様」と呼んできた相手だし。いや、そういう問題じゃなくて！

「それで、どのような御用件でしょうか？」

「ラン＝シー様が、ミコトは男だなんて仰有るから、確かめに来たのです」

「なんて直接的な。もう少し、他の方法は考えられなかったのかなー？」

「ミコトさん」

「はい」

「屋敷に戻っていらっしやい」

「ちょっと待って。話が繋がらないんですけど？」

「今、御自身で確かめられたはずですが」

「よく考えたら、ミコトが男でも女でも、わたくしには関係ないことでしたわ。だって、わたくしはミコトの淹れた紅茶を飲みたいだけですから。それに」

「不意に、抱き締められた。このセライスタという人は、いつも不意を食らわせる。そしてボクは、みっともないくらいに慌てふためく。」

「奥様」

「ほら、また仰有った。ミコトが側にいないと、落ち着かないの。ミコトが戻ってきてくださらないと、わたくし、毎日ここへ通ってしまっわ」

小さな翼に、ふんわりと包まれるのも悪くはない。もしかしたら、誰よりもボクを必要としてくれている人。この小さな翼を、どうして振り払えようか。

クラーニアと目が合った。微笑んでいる。ボクを、待っている目だ。

この宙ぶらりんの手を何処に持っていこうか、と考えもしたけど、答えはひとつしかなかった。

壊さないように、そっと、ボクはセライスタを抱き締めた。

満ち足りた。よく分からないけど、セライスタの注いだ何かが、ボクの器を満たしてくれた。

セライスタは、何を注いでくれたのだろう。

溢れる何かが、色鮮やかに世界を染めていく。

凄い。凄い。凄い。他に、どう言えばいい？

言葉が、見つからない。思わず、笑っていた。

どうして笑っているのさえ、よく分からなかった。

「ミコトさん」

「はい、奥様」

「わたくしの我儘を聞いてくださる？」

よく晴れた日に、庭で、大理石のテーブルを囲む。

白磁のカップが三つ。紺碧を落とした紅茶に、笑顔が映った。

笑顔（後書き）

自分が読みたい物語を書いてみました的な作品です。

こんな趣味に走りまくった作品を、最後まで読んでくださって、本当にありがとうございます。

そして、ちよつとでも「分かるよー」と思っていただけなら、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9836h/>

可愛い花にも棘はある

2010年11月8日08時48分発行